

V
が
で
か
い
本



R18
ADULT ONLY
★★★

Guest



なつき/Illustration



まるしゃも/Comic

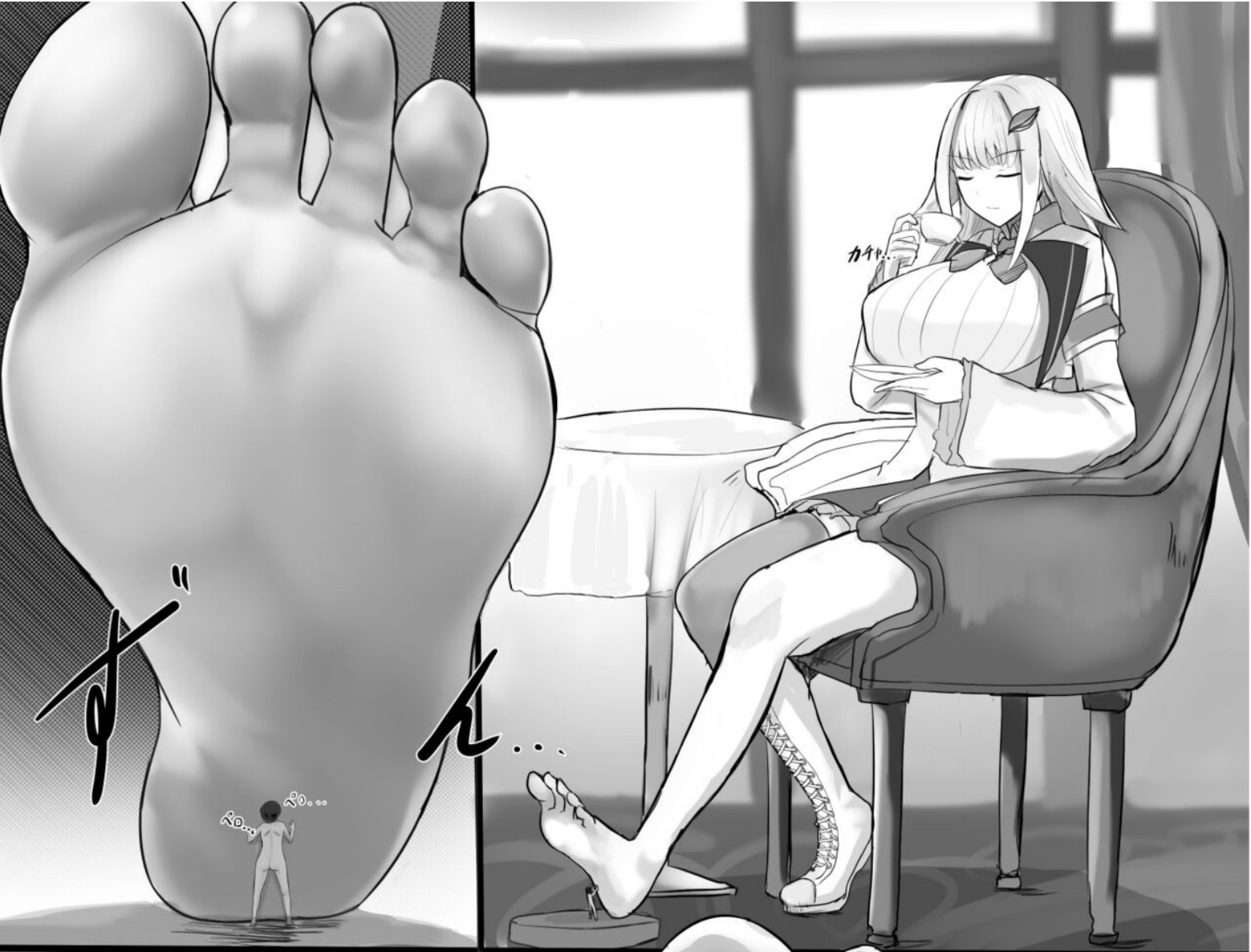


コルヨノ/Short Story



DoLche/Short Story

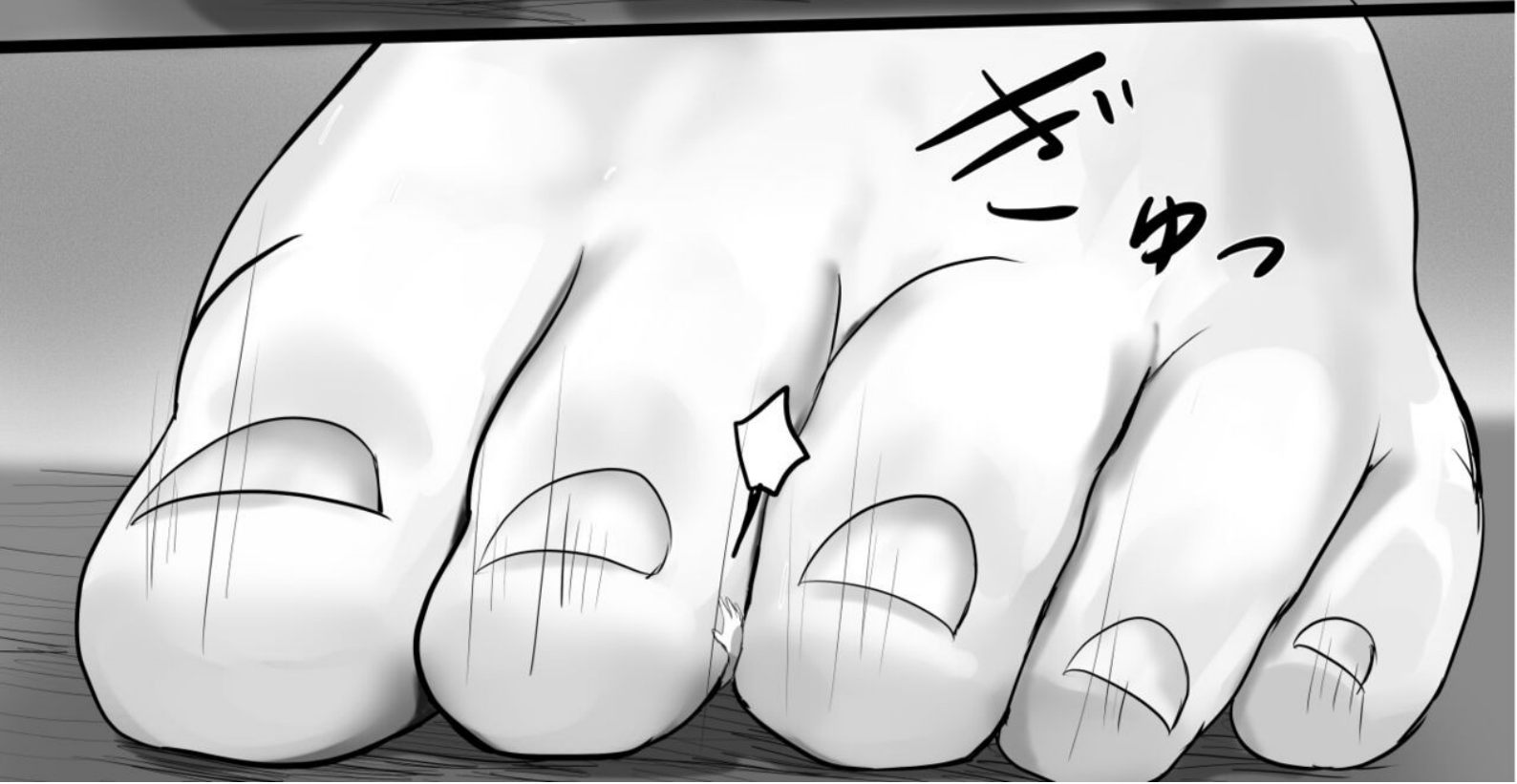
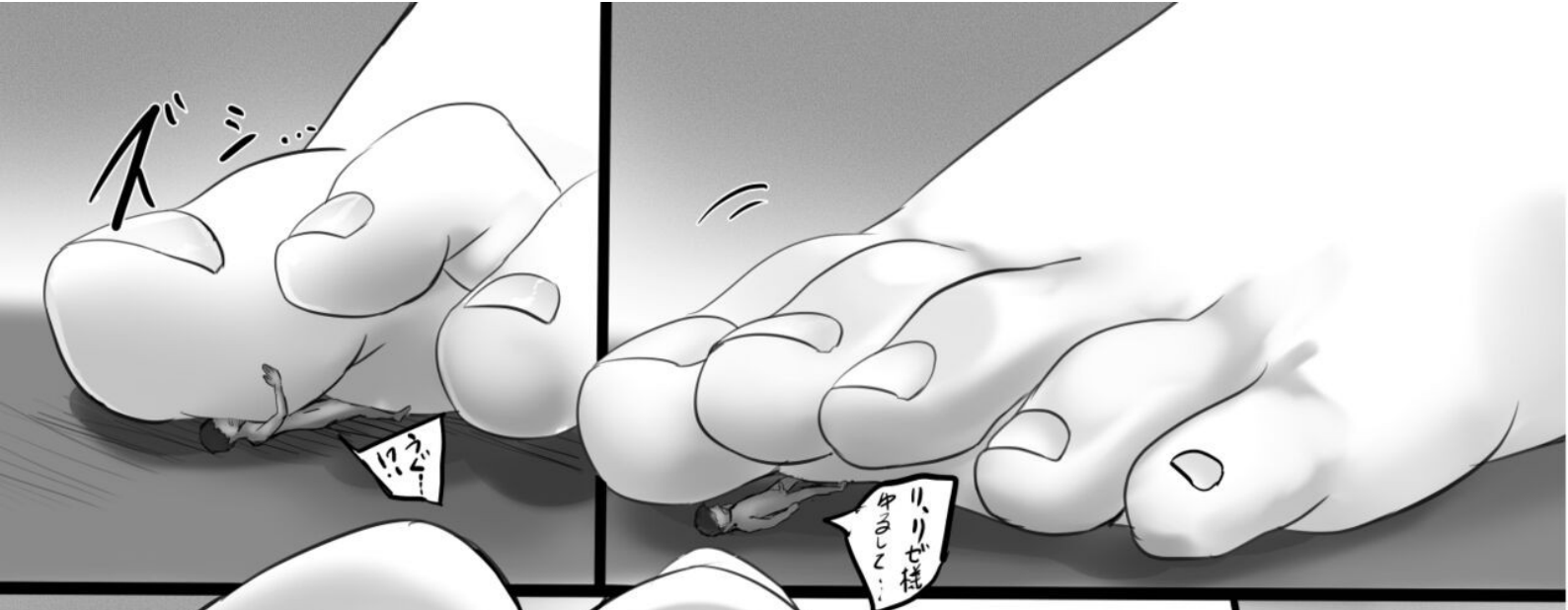
転載及びWebなどへのアップロード禁止

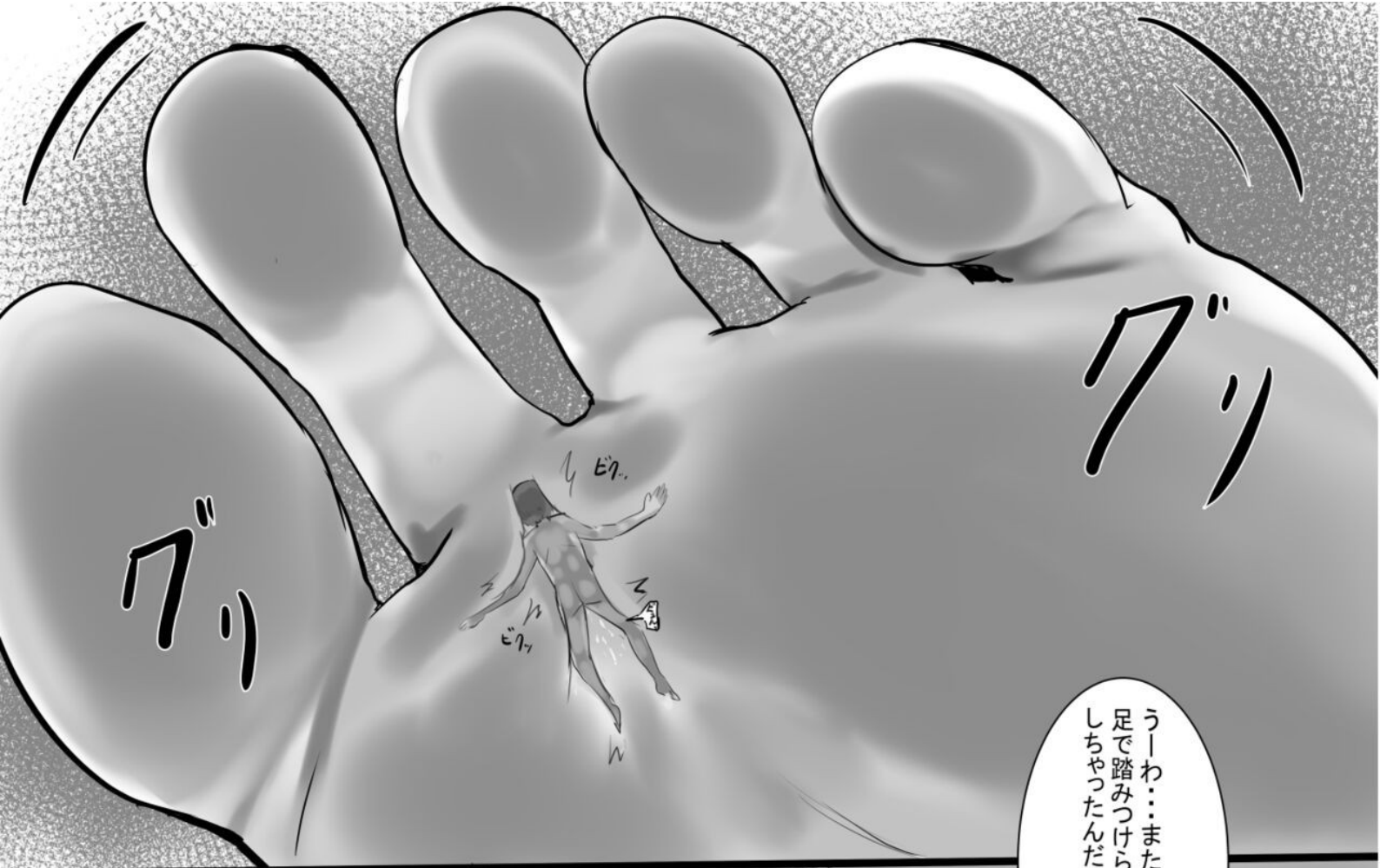


使えない小人さんは
躑躅が必要だよなあ？

ただでさえ使えない小人
雇ってやってんだから
少しぐらい役に立ちなよ

まだ片足も終わんないの？





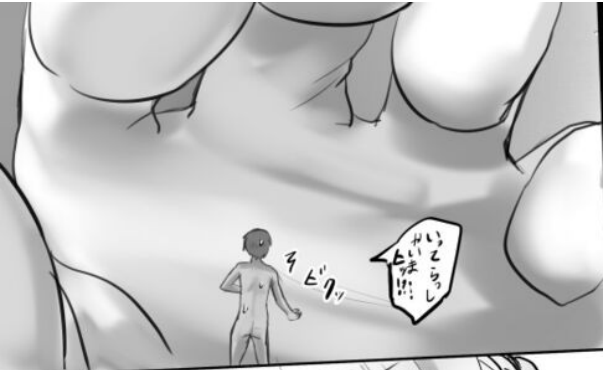
うーわ：またご主人様の
足で踏みつけられておもらし
しちゃったんだ



私が最後まで
使い潰してあげる

キミみたいなド変態さあ、
私ぐらいしか雇ってくれないよねえ？

ガク



今日はこれから
パーティーに参加しなきゃ
いけないから



あんな人が多いとこ
一人でいくわけないだろ
お前も来るんだよ

ははは！



とういうわけで

縮め
♡



でもこのサイズだと
ちよつと・・・持ち歩き
にくいよねえ



これからこのサイズで
いよっか

あはっいいいサイズに
なったじゃん！
かわいい！



ムキ♡

むき♡...

ぶちっって潰れないようには
してあげてるから奉仕に
集中してなさい

じゃ、パーティの終わりまで
ここで奉仕を続けてな



じゃ、いってくるね♡
キミもがんばれ♡

私の機嫌次第ですぐに
潰してやれるんだから
ちゃんと仕事しなさいよ

むわ...

キム♡

ムキ♡

ムウ...



この人たち、私が今
小人を胸に閉じ込めてるなんて
絶対気づかないんだろうなあ

うわー…あの人ずっと
私の胸みてるよ…
誘って玩具にしちやおうかな…



あはは…お上手

リゼ様相変わらず
お美しい…

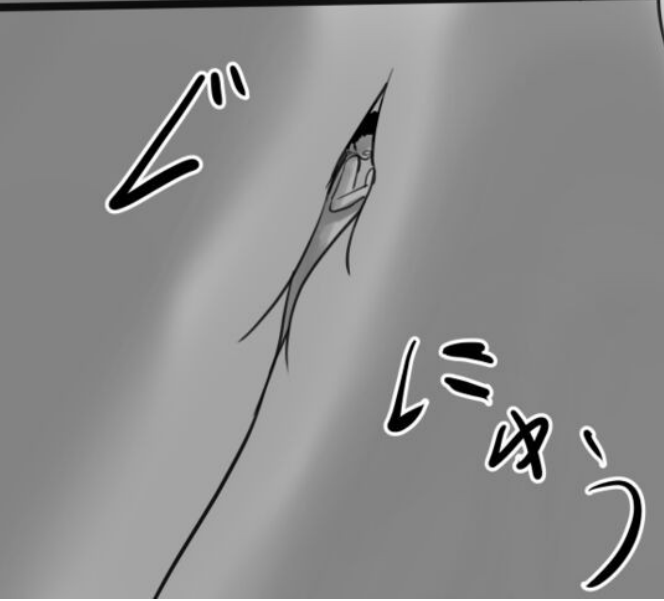
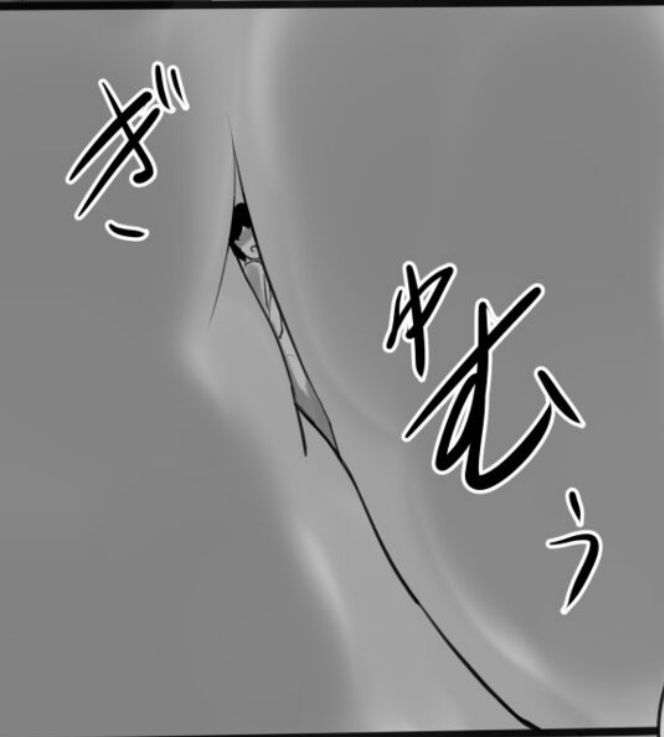
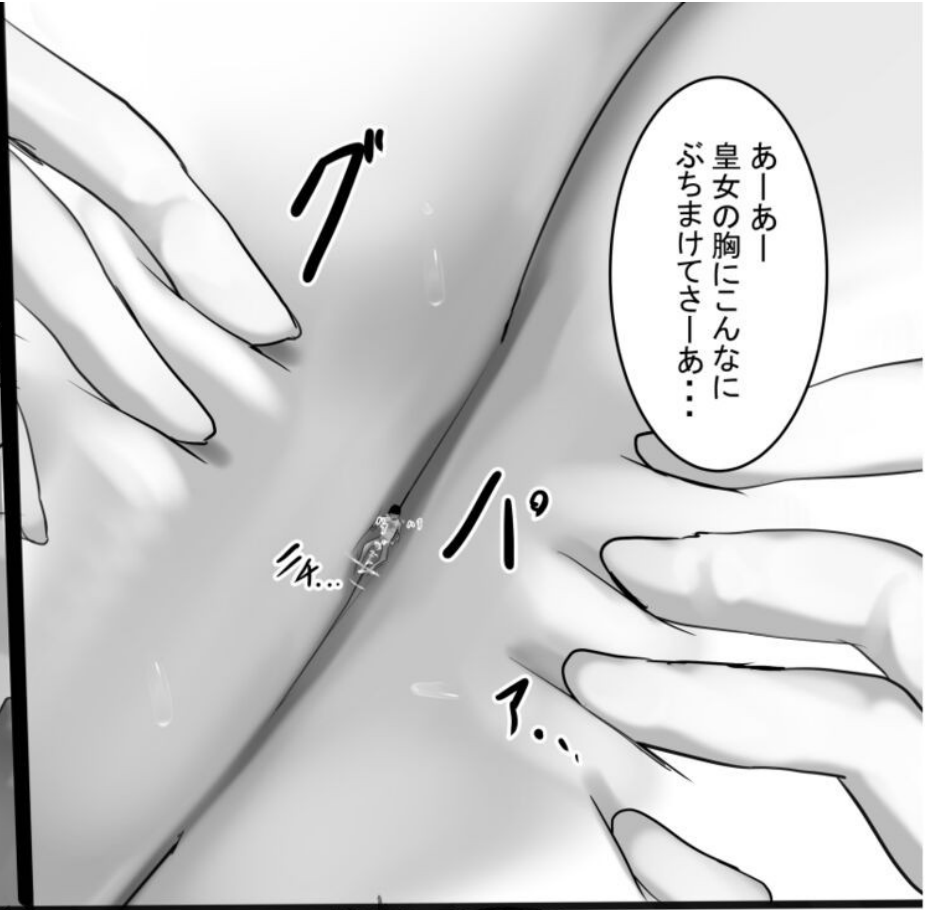


ちっちゃすぎて見つけて
もらえないなんて
かわいそ…❤

仲太❤



私の私物じゃなかったら
極刑だったよ？



ほーら
大好きなおっぱいに
食べられてイっちゃいなー？

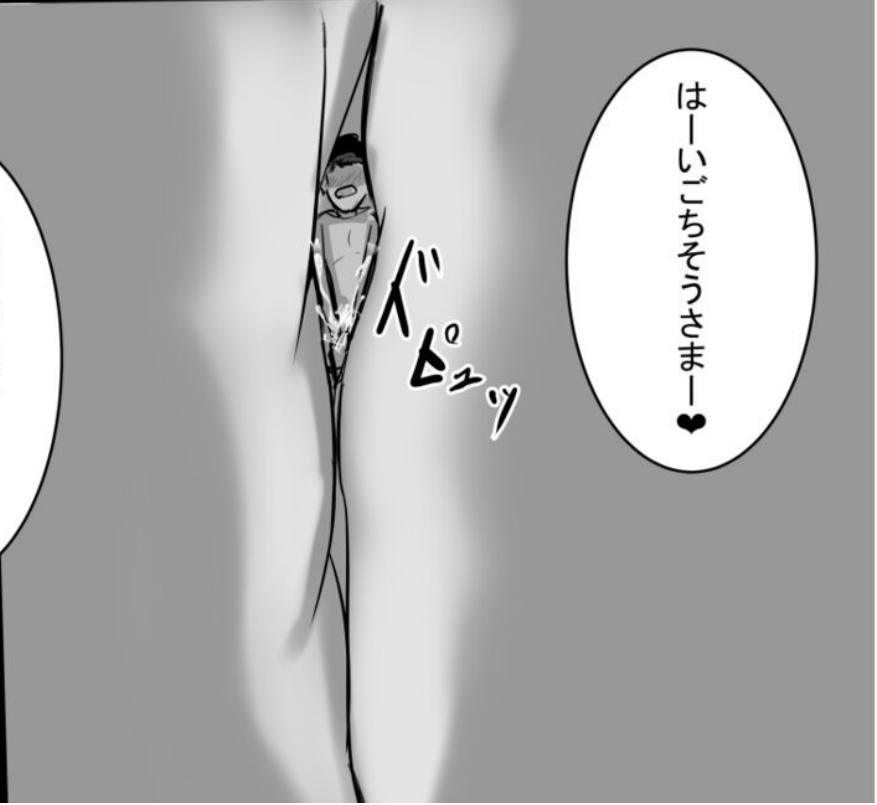
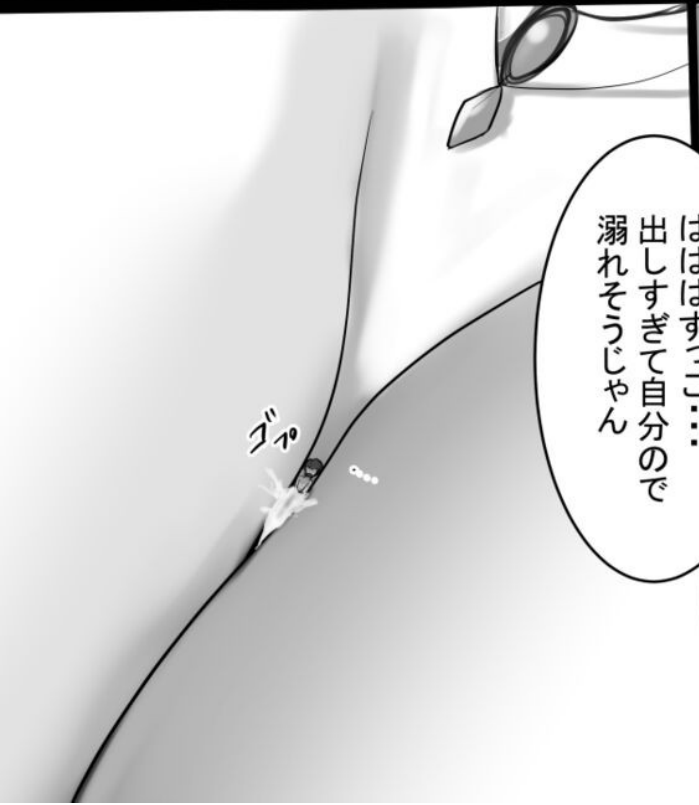
お仕置きなんだから
イってもやめてあげないからね

ご主人様の乳内で
情けなくイけ！



はい「ちそうさまー」♥

はははすっ「...
出しすぎて自分ので
溺れそうじゃん





パーティーにも戻るのも
面倒だし…キミが代わりに
私を楽しませてよ



ほら…好きに触っていいから
気持ちよくしてよ



不敬罪で
小さくなれ♡

小人の癖に感じさせてくる
なんて生意気じゃん……



アハハ!
乳首より全然小さく
なっちゃった!

キミ一人じゃもう
乳首にも勝てないねえ?





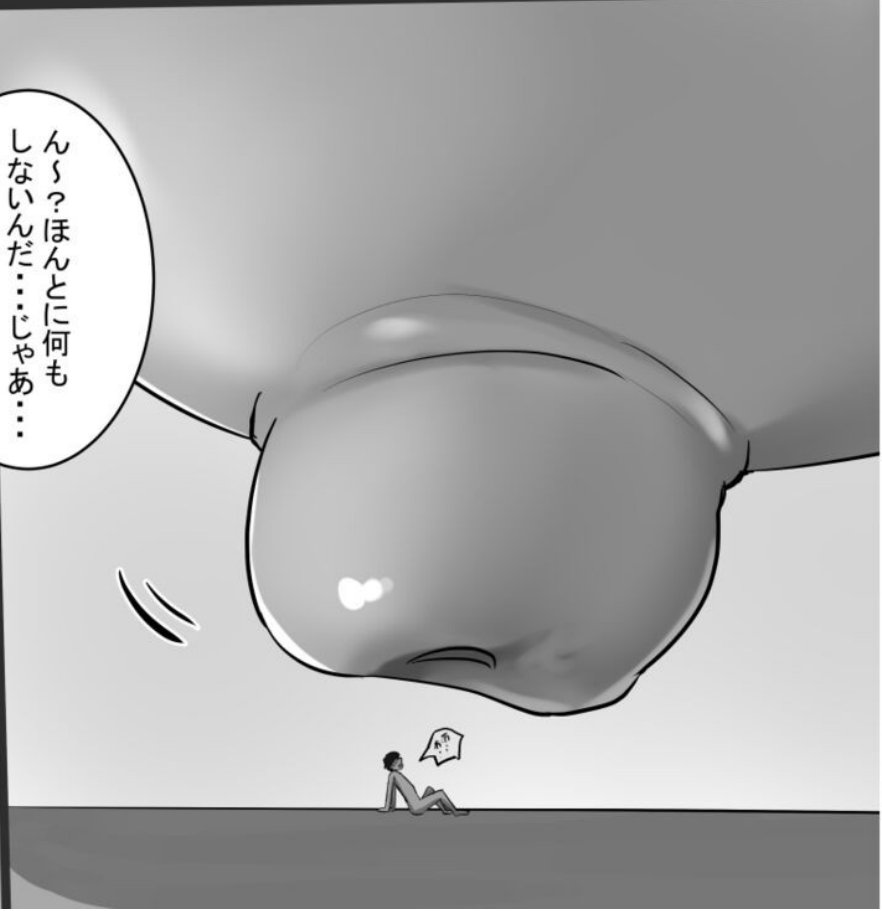
ほおら潰しちゃうぞお
おっぱい様に平伏しなさい

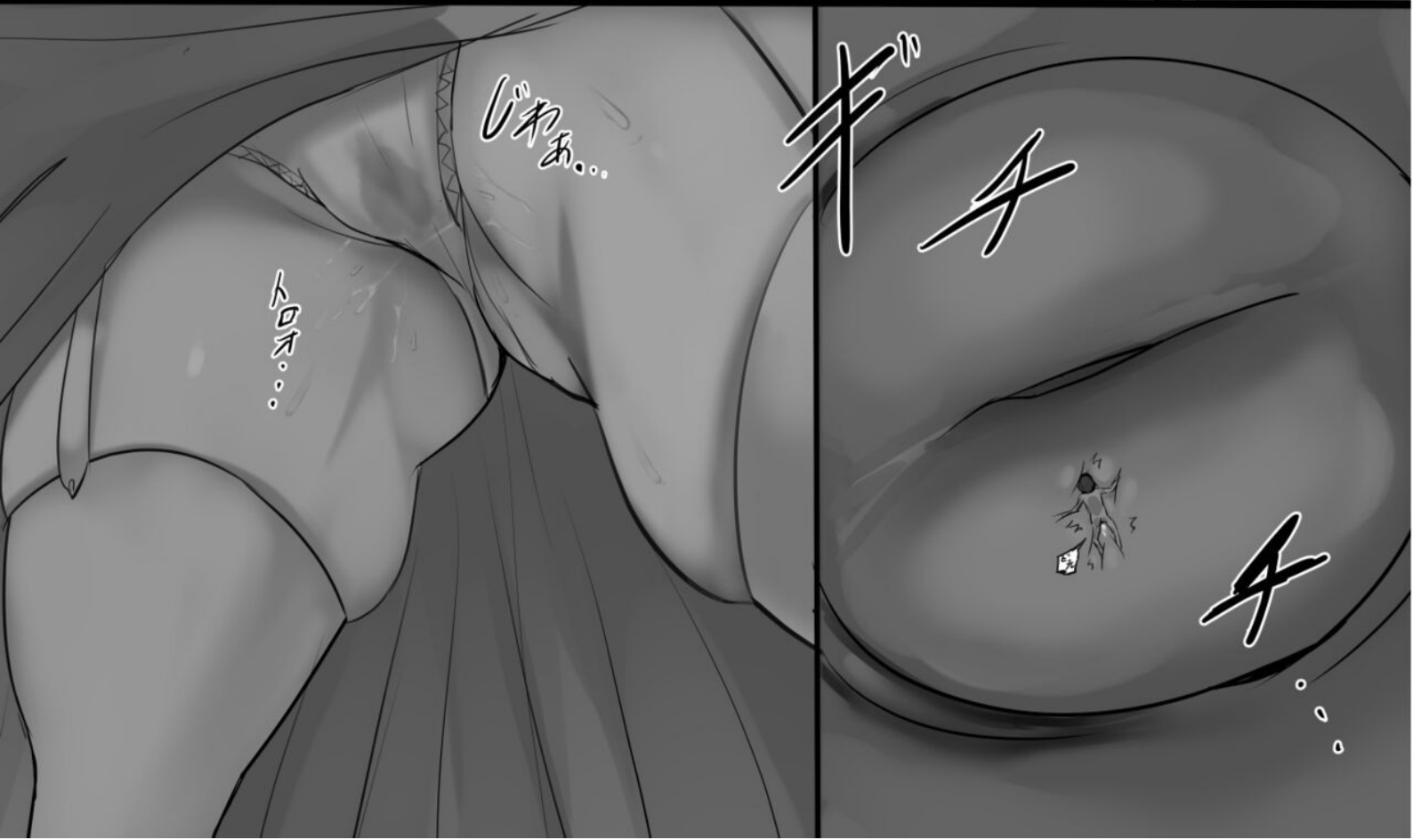


何にもできないなら
私から攻撃しちゃうのかな



ん？ほんとに何も
しないんだ…じゃあ…
圧殺の刑です♥







ふふ、乳首に
無様に張り付きちゃってさ

こんなド変態小人は
もう処分しちゃうかあ♡

リ
グニ...

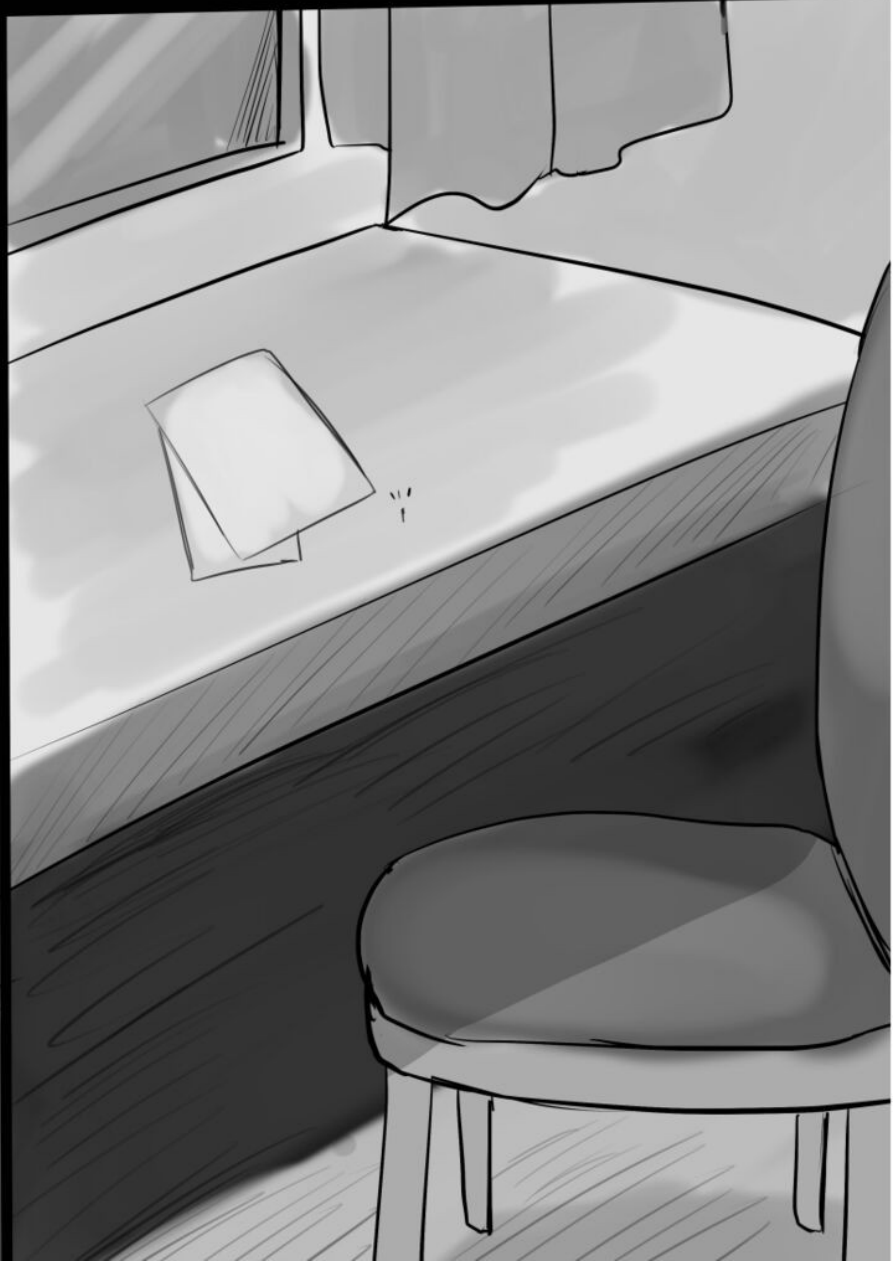
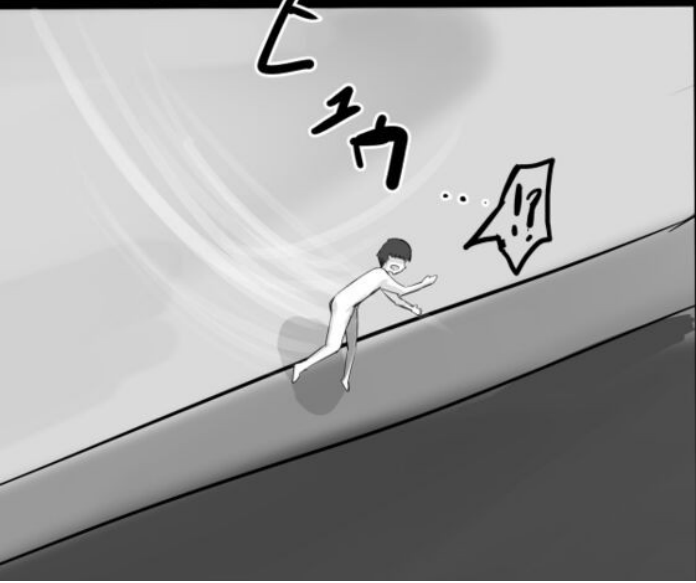
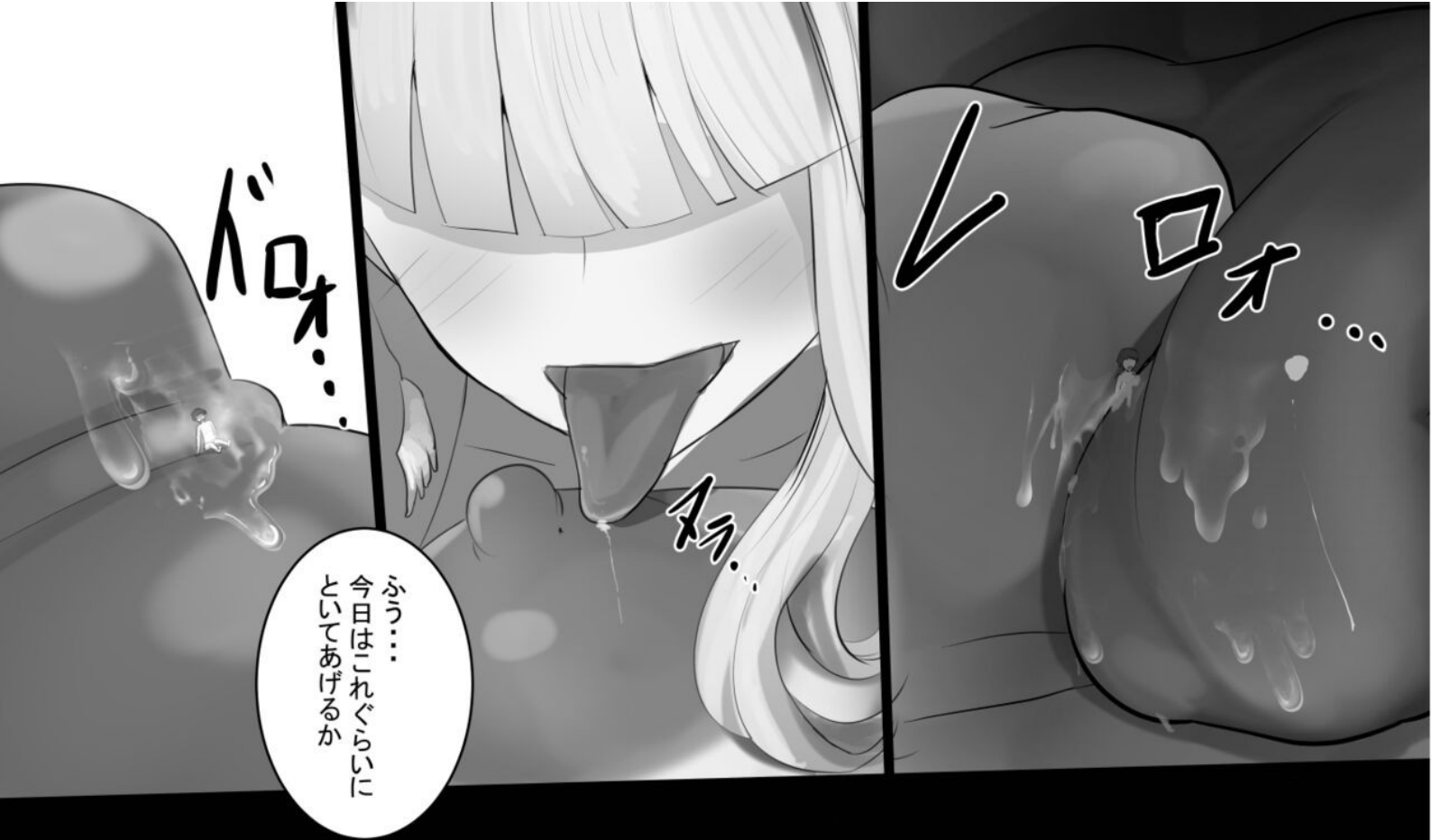
ツク♡



いただきまーす♡

パフ♡

あーん♡





って……はあ？
いない……！？
どこいったあ！？

チビ
ただいま

ズー……
ズー……

ズー……

ズー……



見つけたら一回
本気で踏み潰す
ぐらいしないと……

ふん……
そっかあ……ぜんぜん
お仕置きが足らなかったかあ

ア

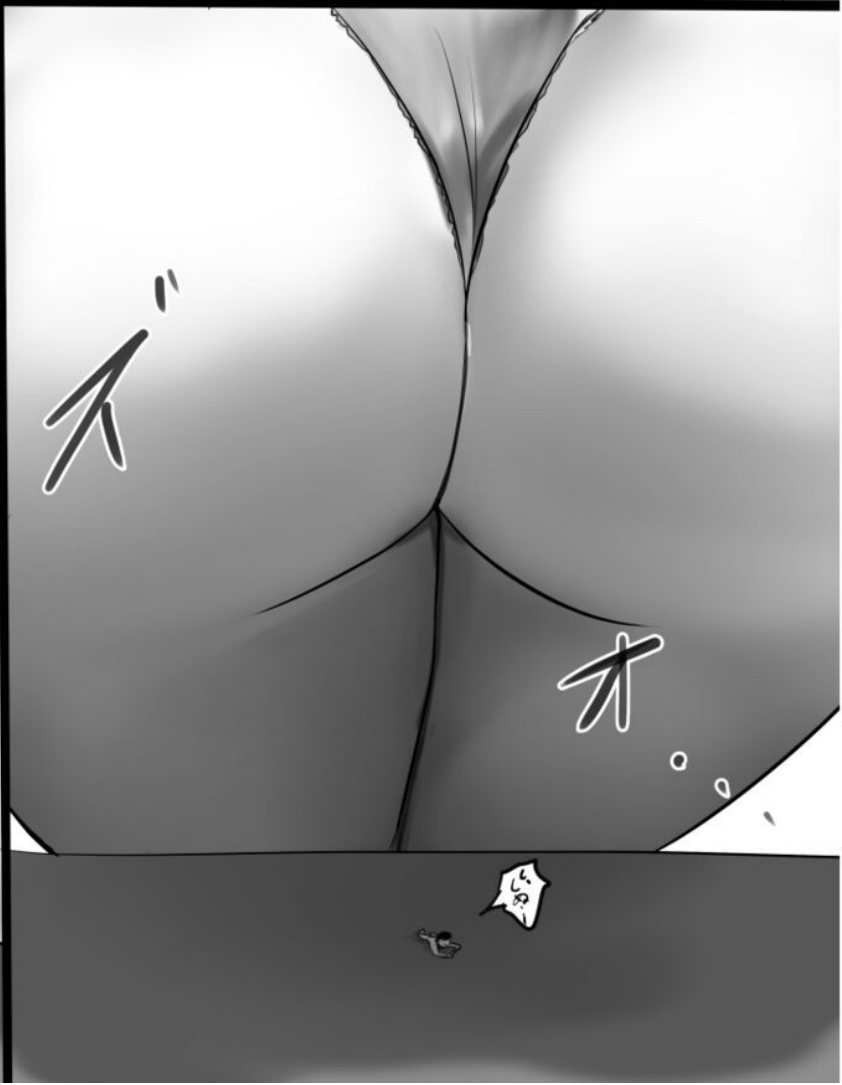
カ

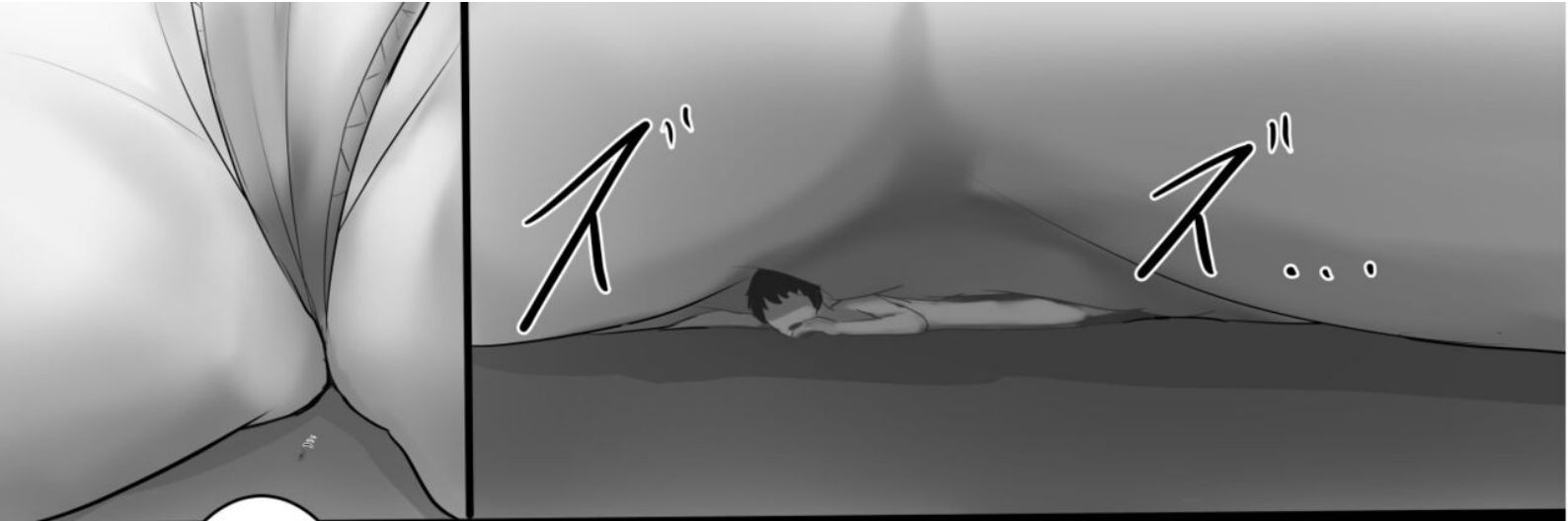
ミキ...

エッ!?

...おやあ?
とんでもなく不敬なやつが
いるようだなあ?

ミキ





うわ……小さくしすぎて
見つけ辛いな……

む

わあ



ほら、筋トレしてきつめに
「」登ってきつめに

ひひひ、そりそり...

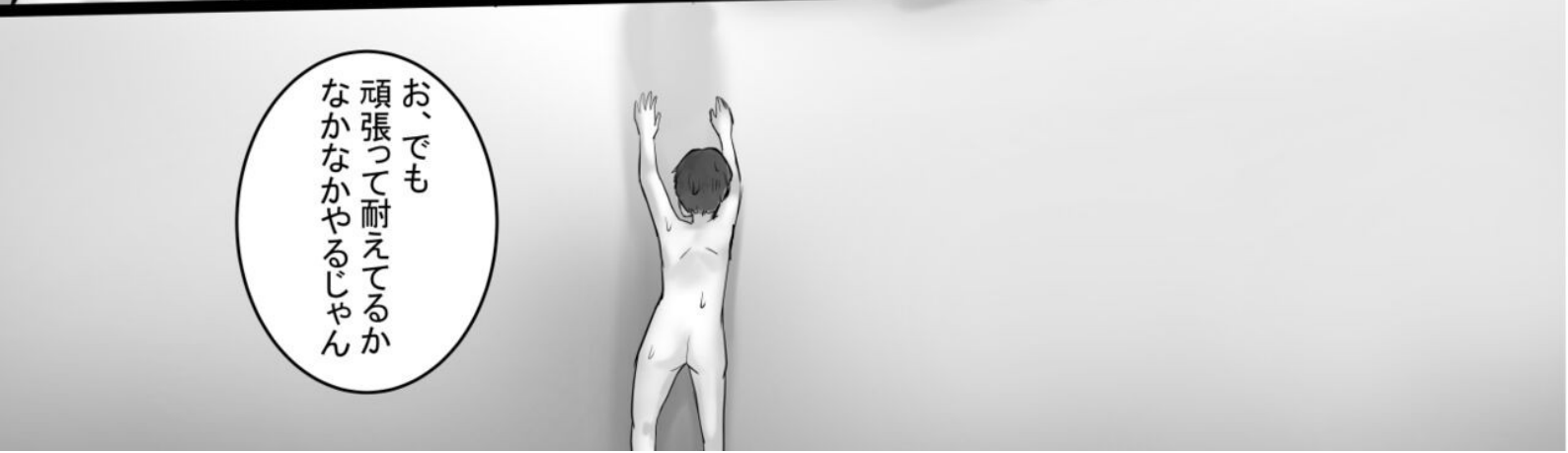
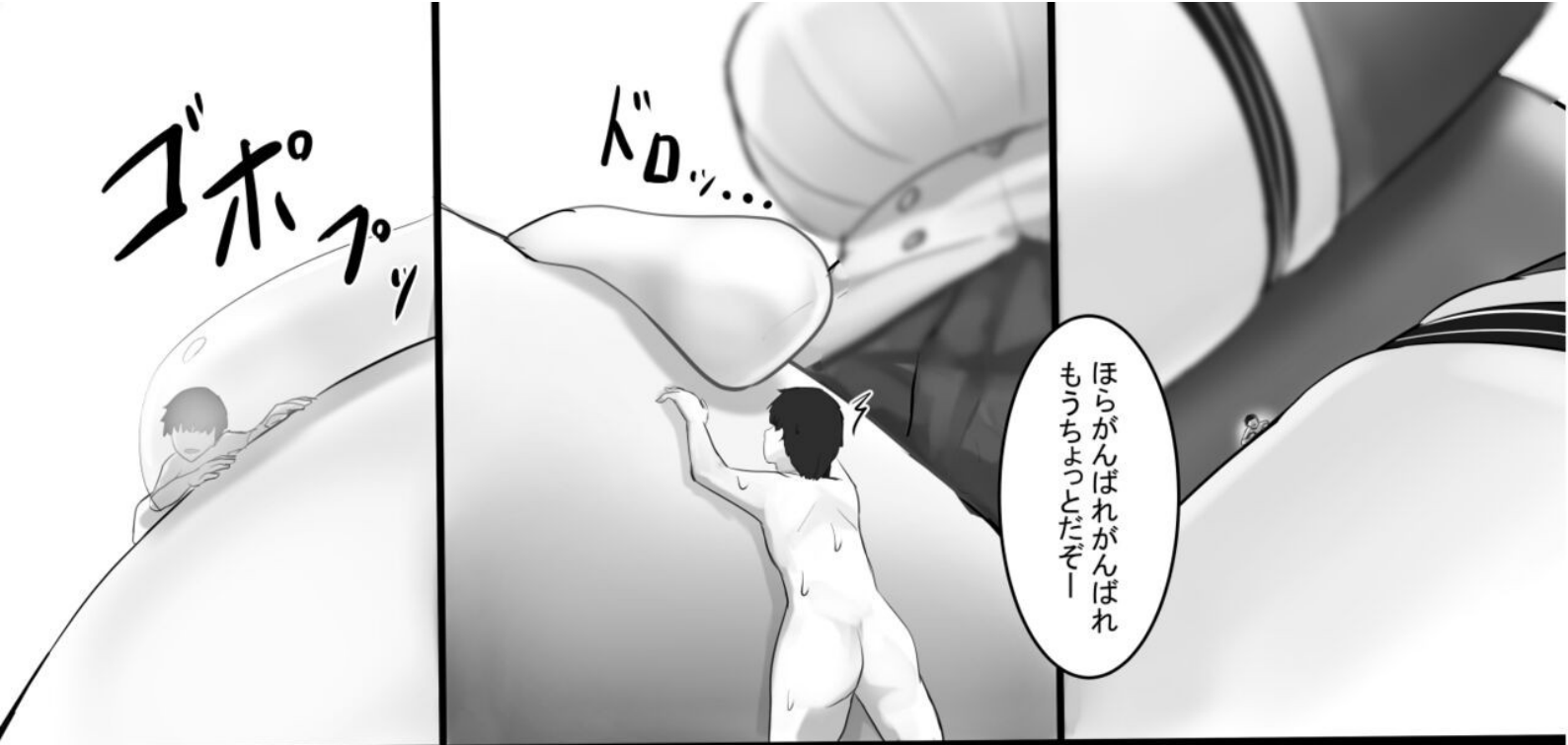
ク
ワァ...

大の男が女の子の太もも
登らせられてるの
屈辱だらうなあ

私以外からみたら
ただのゴミにしか見えないだろうし...
このまま公務いっちゃおうかな？

...ねえ、それ登ってる？
遅すぎるでしょ
私も暇じゃないんだけどな

クク



でも時間切れでーす♥

ク
ク
ク

ピ

ク
ク
ク

情けないな、
腐ってもヘルエスタの人間が
汗ひとつで死にかけるなんて
なんてさーあ…

ク



ギョウ

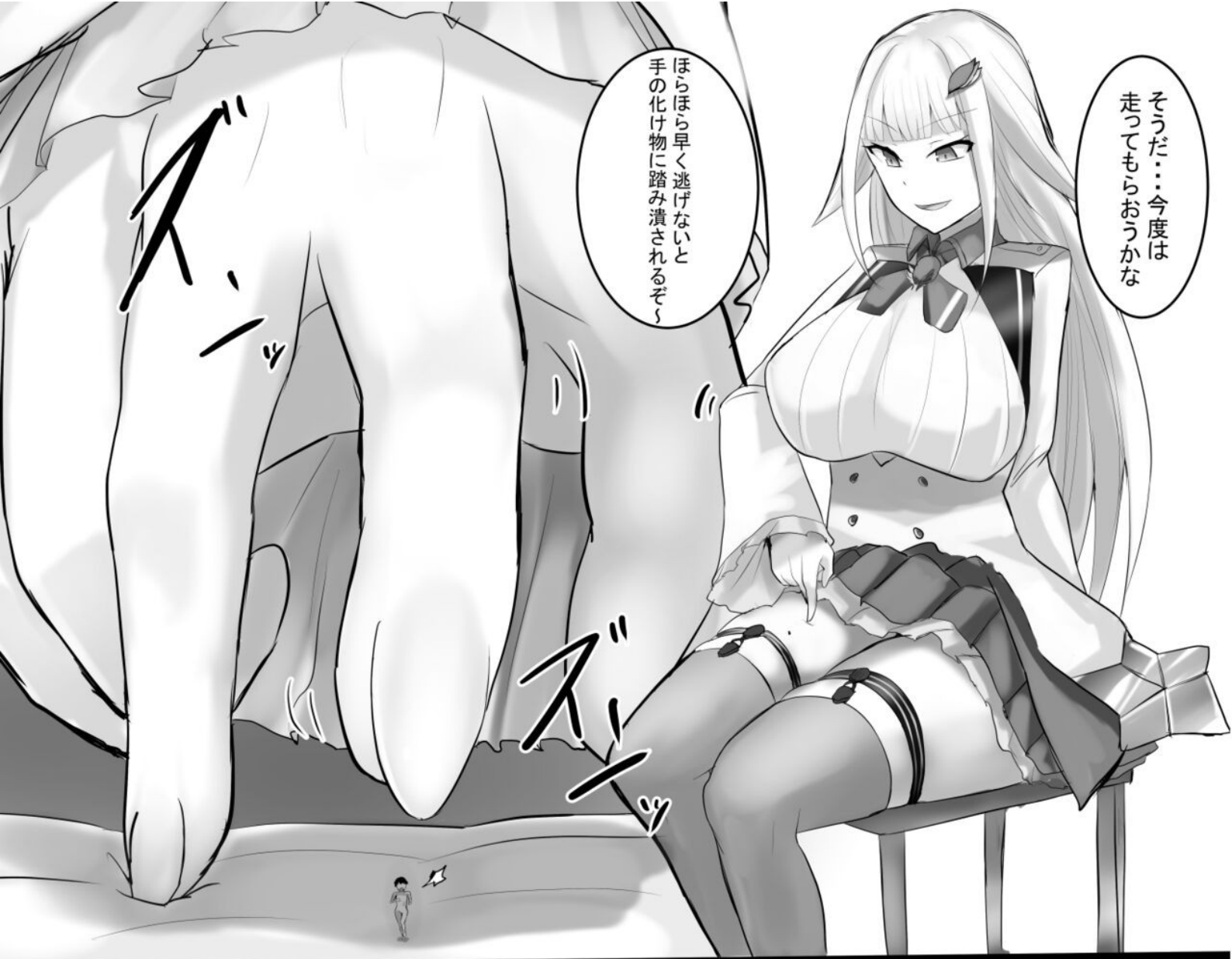
ギョウ
ち♡

ギョウ

はい、ここがお前が数十分かかって
辿り着けなかった太ももの頂上だよ

むちい...

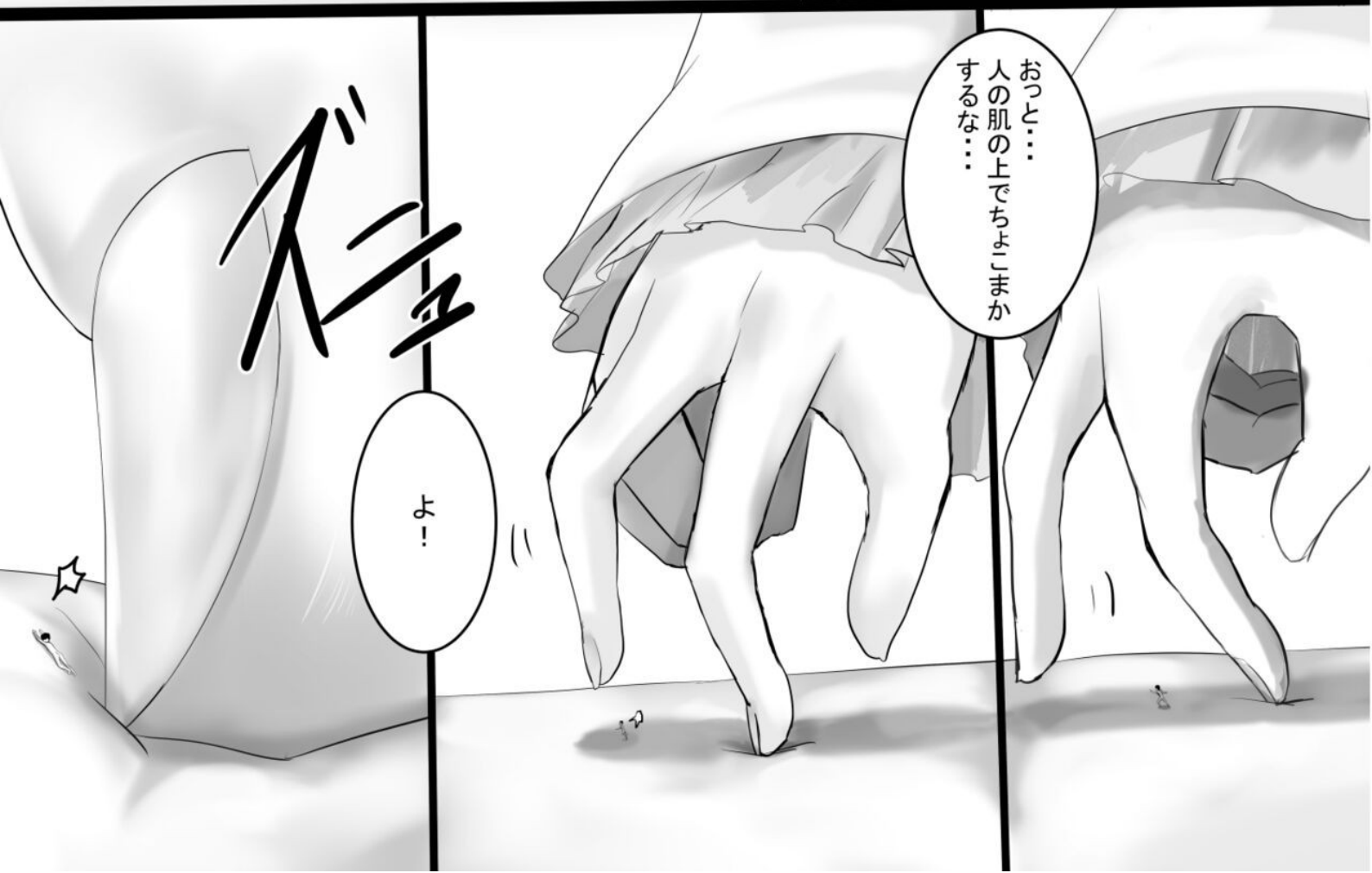




そうだ…今度は走ってもらおうかな

ほらほら早く逃げないと手の化け物に踏み潰されるぞ

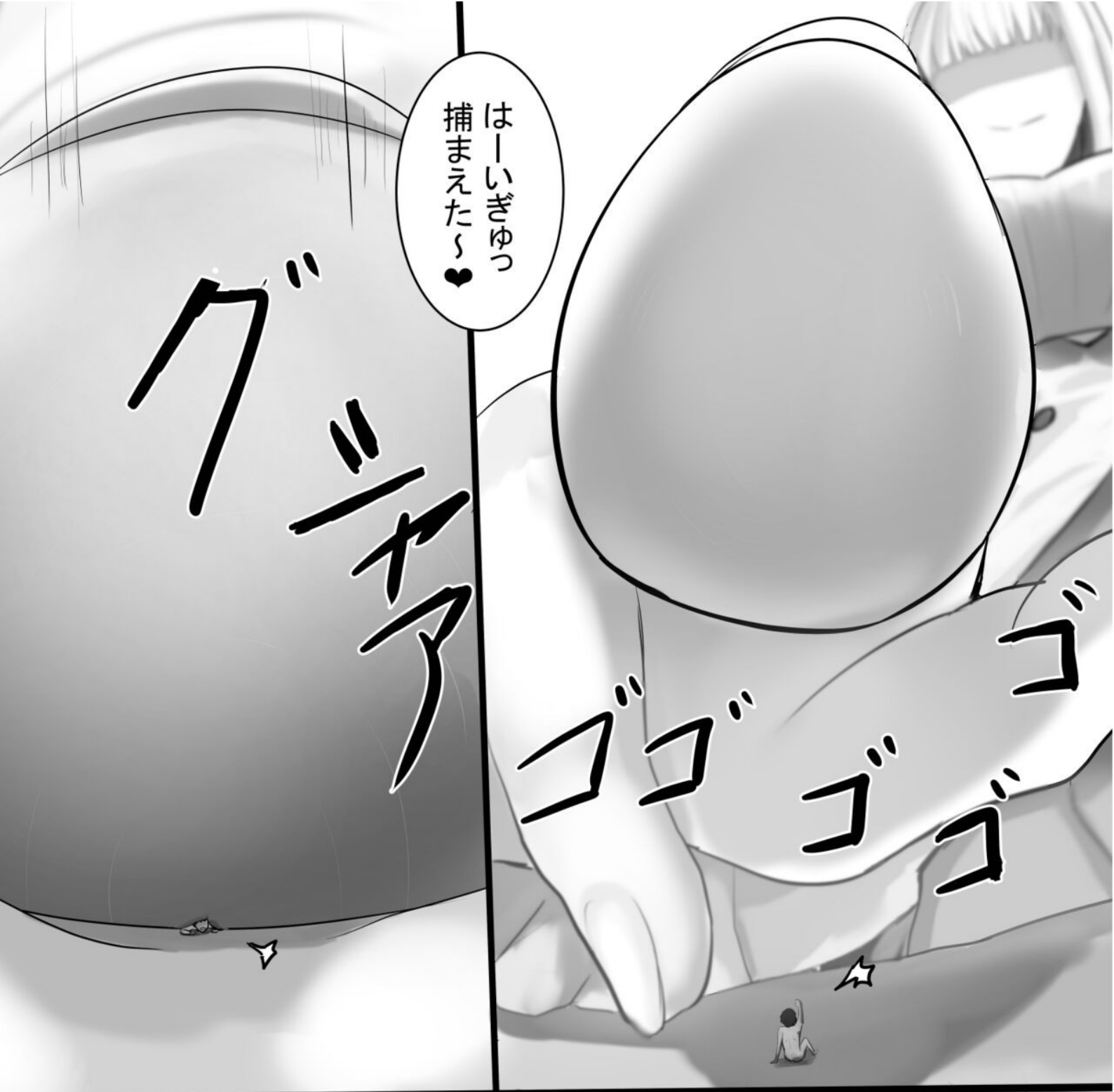
ズッ
ズ



おっと…人の肌の上でちょまかするな…

よ!

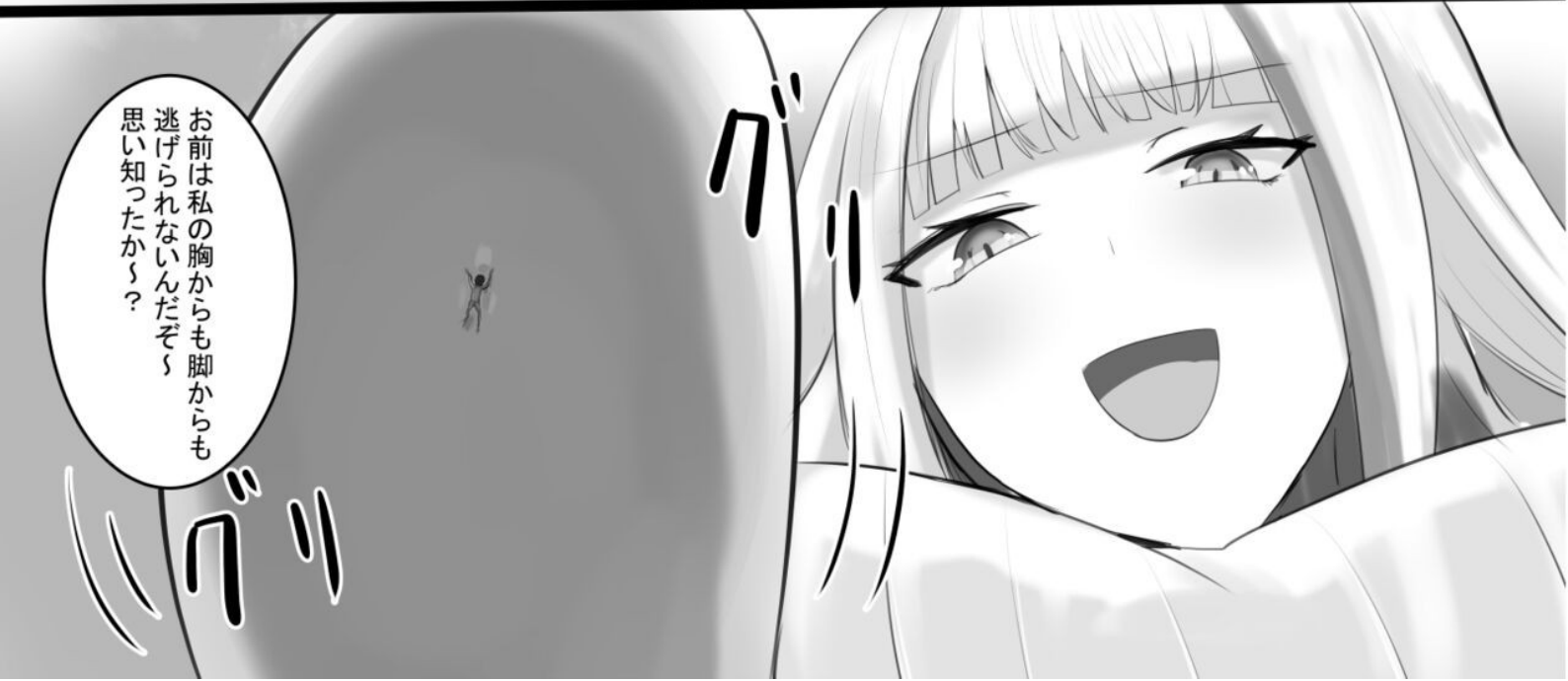
ズッ
ズ



はいぎゅっ
捕まえたっ♡

グ
ニ
ア

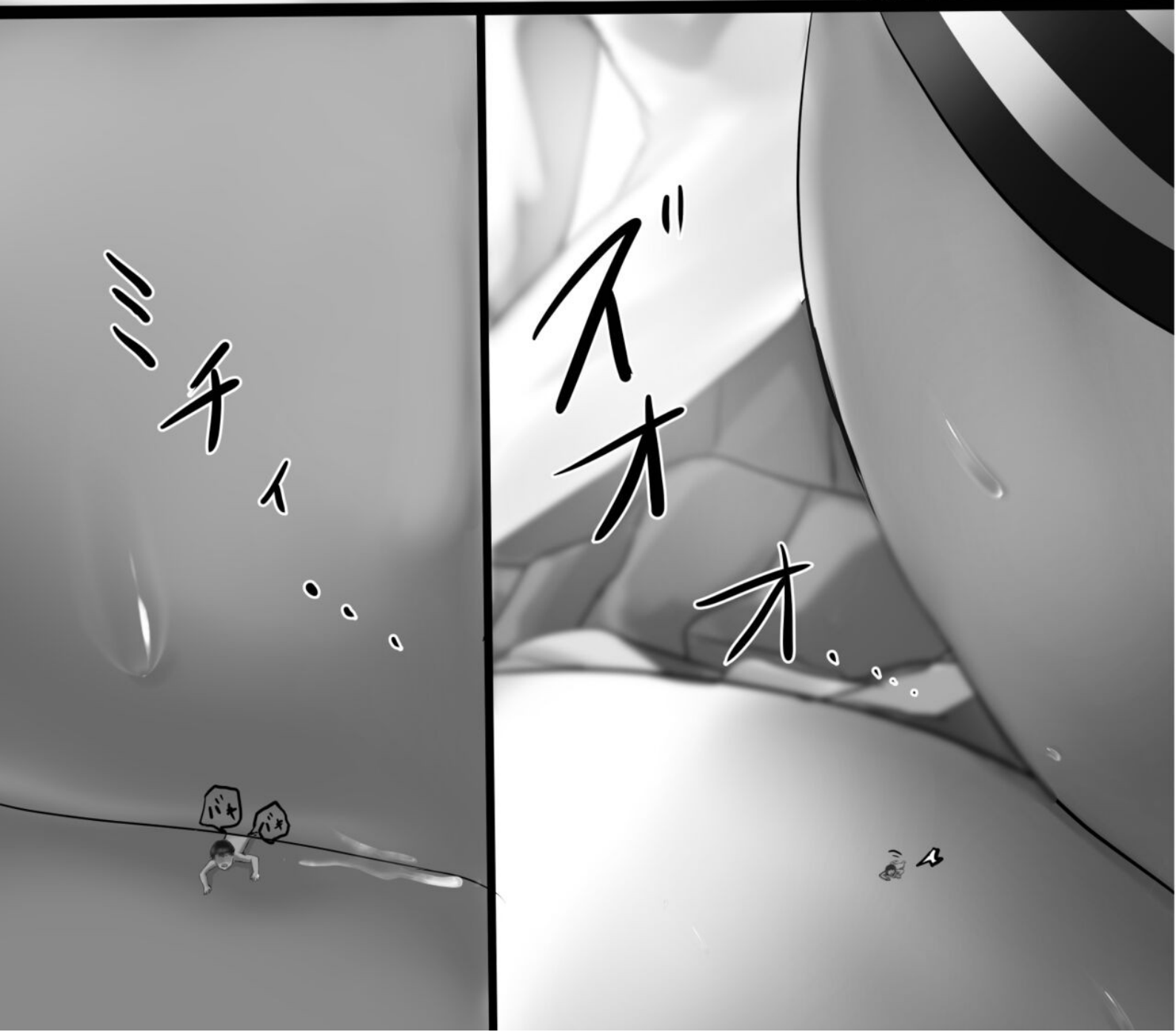
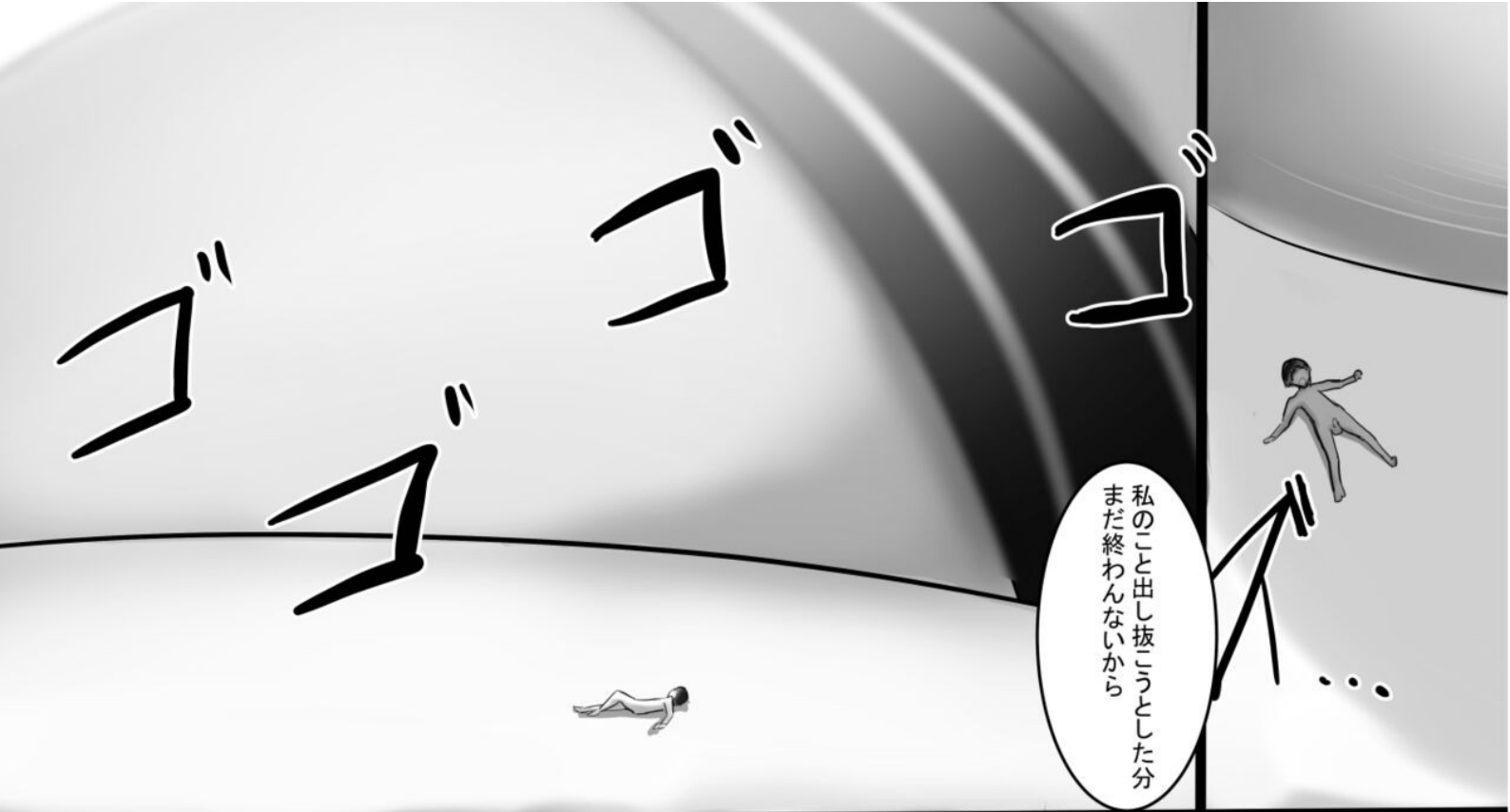
ゴゴ
ゴゴ
ゴ



お前は私の胸からも脚からも
逃げられないんだぞっ
思い知ったかっ？

ガ
リ

ガ
リ



△ "△" △ "△"
...



みちい...





二度と逆らう気が起きないぐらい
搾り取ってあげるから

ほらもうびくびく
してるんだから情けなく
いきなさい？

ズ
ー
ッ

あ
う



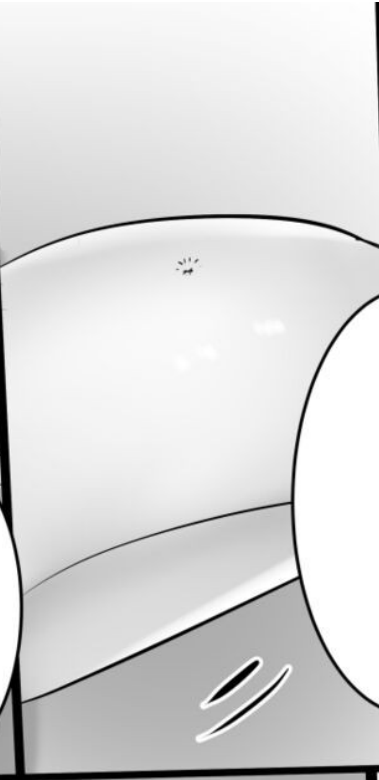
イ
け
よ

イ
ッ
ッ

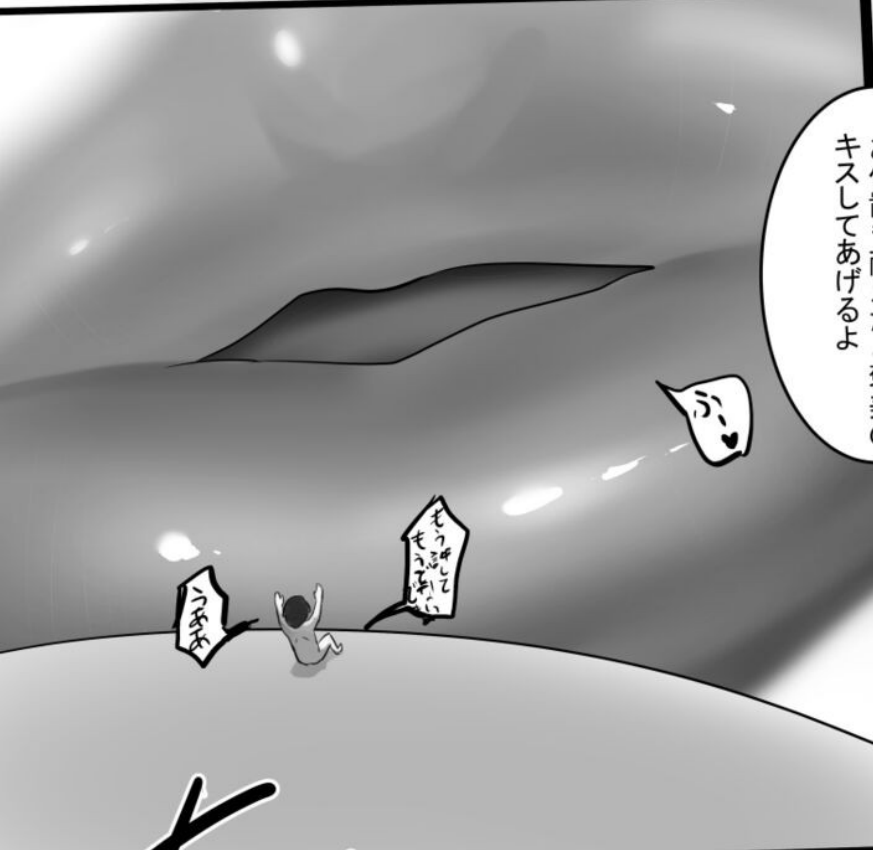
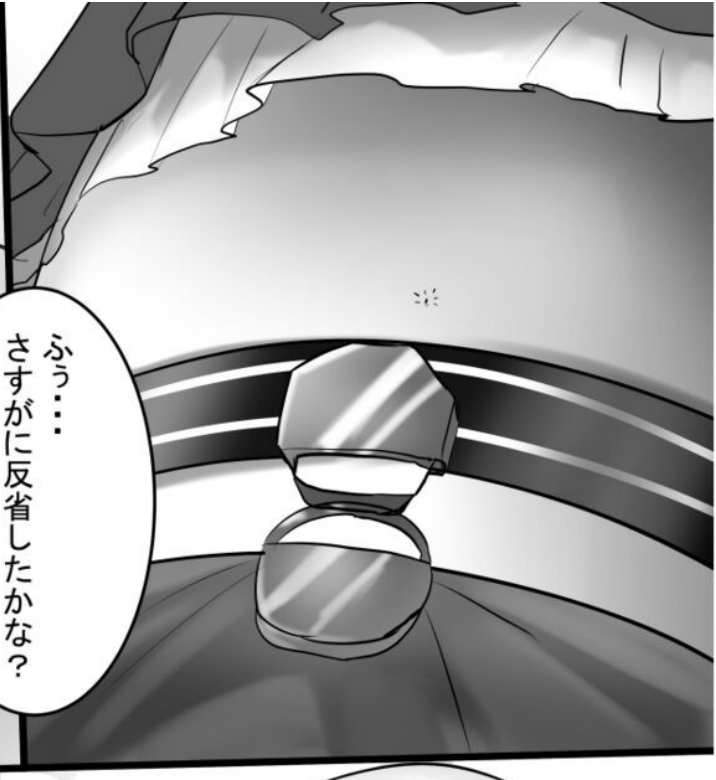
ぐ
っ
っ



ふふ…
全身ぼろぼろじゃん
次はないからね



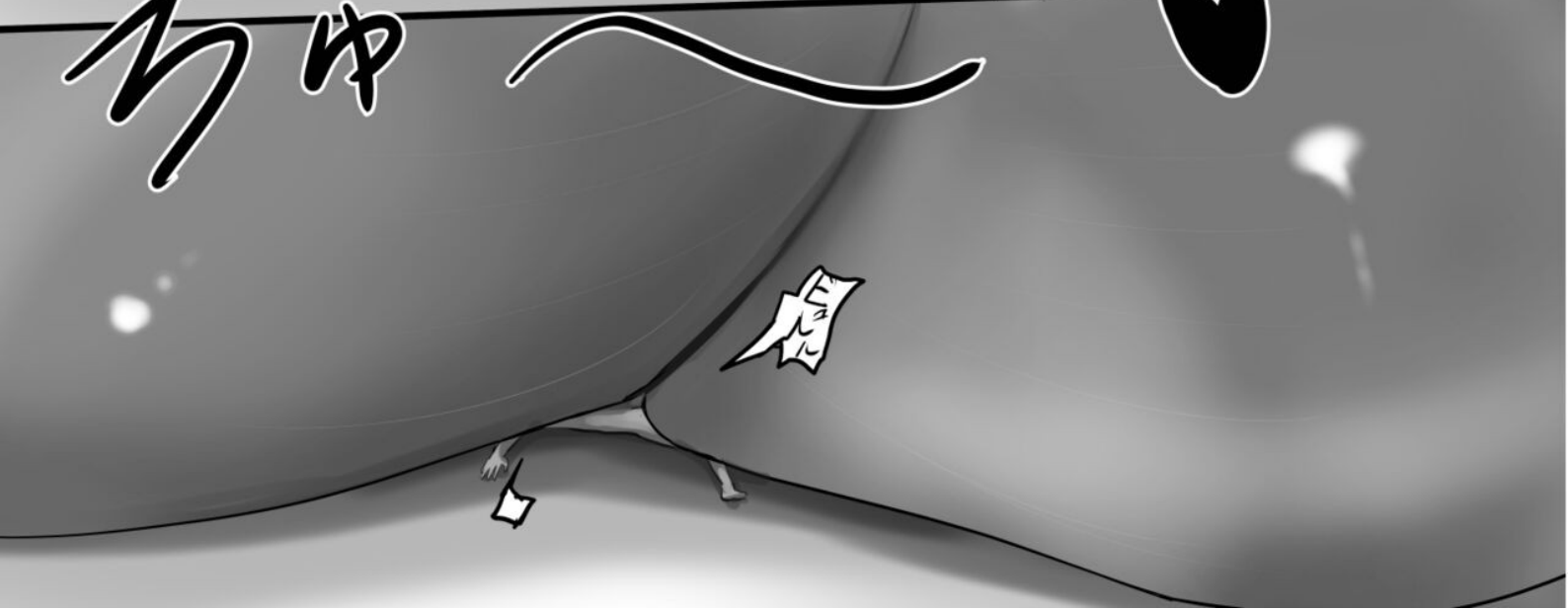
ふう…
さすがに反省したかな？



そうだ
お仕置き耐えたご褒美の
キスしてあげるよ



ちゅ



ん〜…んむっ♡

あやむ…

これだけかわいがって
あげてるんだから…
今度は逃げないでね♡

グ
チャ…

た

あ
あ

ニ

チャ…

END







こんにちはー♡

リアルすぎる
ASMR

生ナマ
おなかの音
体験へ
ようこそー♡

ん!?
じわ...



ん

!?

♡

ん



食道をゆっくり
降りていく感覚…
気持ちいい♡

本物の
胃の中は
どう?
しあわせ?

かわいい
小人さん♡

おなかの中に
もう一人
生き物があるって
最高……♡

死ぬまで
たーくさん
あばれてね♡

あはち♡

END

健屋に看護される縮小病患者達の話

作・コロヨノ

世に若い男性のみが罹る『縮小病』というものが広く知れ渡った社会にて。罹患率自体はそう高くないが、子供ですらその病名を聞いて罹りたくないと言きだすその恐ろしい病の対処法は未だに不明で死亡率は100%。できることといえば、長い時間をかけて開発された薬で進行を遅らせ、1日でも長く縮小の速度を遅らせる程度。『縮小病』で入院する患者もその多くはそんな奇病を万が一うつされてはたまらないと捨てられたようなもので、どの道情のあるご家庭だったとしても入院すれば面会謝絶として今生の別れとなり、彼らは病院で家族に看取られることなく人知れず死んでいった。

そんな『縮小病』患者が相手でも、女性の医療従事者達は真摯に対応をした。対応するのが女性であることには、いくつか理由がある。感染するわけではないというのが通説だが、全容が掴めておらず何が起ころかわからないので、念の為男性スタッフが隔離されること。小さな姿に庇護欲をくすぐられるのか、『縮小病』発見当初から女性の研究者、医療従事者達が陣頭に立って説明、ケアにあたっていたこと等。世間一般的にはそう言われている。それ以外にもまだ理由はある。その内容を知るのは女性達と、研究所や病院へ運ばれた『縮小病』患者達だけだった。

とある病院の廊下でぺたぺたと内履きサンダルを鳴らし歩いて、1人の女性が『ステージ1』とプレートに書かれた病室に入ってきた。

「はいみなさん、お加減はいかがでしょう？朝食の時間ですよー」

彼女の名前は健屋花那。ショッキングピンクのラインと丸みを帯びた十字の刺繍が可愛い、胸元が大きく盛り上がったナース服、その上に白いエプロンドレスを付けてナース帽を被った、見たまま医療従事者の女性。ほんの少し釣り目ながらも優しい気な表情に左目の連なる泣きぼくろと口元から覗く八重歯が、仄かに妖艶な雰囲気醸し出す美人。パチリと開いた薄紫の瞳はしんとした病室で星のように輝き、二つ結びにした限りなく白に近い薄桃色の髪を揺らしながら最初の患者のベッドへ向かい、カーテンを開いた。

中には当然ある患者用ベッド。しかしそこに入る人間はいない。その毛布の上の揺り籠の様な特別な寝台に、患者は寝ていた。およそ30cmの小さな人間。中学生くらいの歳の男の子。合うサイズの病院着が無いので、裸でまるで赤ん坊のようにタオルに包まれている。カーテンが開いた事によって蛍光灯の光に目を覚ました男の子は、寝惚け眼を擦りながら起きあがった。そしてすぐにハッと、自分を包む毛布を振りほどいて揺り籠から逃げようと慌てた。その間にカーテンは閉じられ衣擦れの音がし、ようやく揺り籠から脱した男の子がベッドの中に隠れようとしたところで、小さな体はがしりと大きな両手で掴まれた。

「こーら！逃げないの！」

ひよいと軽々持ち上げられた男の子は暴れて抵抗するが、意に介される事なくくりと回されて、健屋に正面を向けられる。男の子の目の前にはエプロンドレスとナース服を腰まで脱ぎ、下着すら取り払った健屋の爆乳。どたぶんと音の聞こえてきそうなそのサイズは男の子の頭より大きく、ぶくりと膨らむ乳首は男の子の口になんとか収まるくらい。先からは涎の様に母乳が垂れ、甘い香りを漂わせている。

これが男の子の、『縮小病』患者の朝食だった。体の小さい『縮小病』患者は胃も通常の食べ物を受け付けないくらい弱くなり、点滴をするにも針だけで大量出血しかねないので、栄養を摂れず衰弱していった。しかし『縮小病』患者の周囲の若い女性は、どういうわけだか母乳が出やすくなる事が研究と検証を重ね判明した。それからの『縮小病』患者の食事はもっぱら三食母乳というのが常識に。哺乳瓶に移し替えられる事もなく、入院を拒んで家で治療する者は姉や妹、ひどければ小学生や幼児に授乳されるなんてことも。そういう意味では、20代の成人女性に授乳されるのはまだマシな扱いだろう。

とはいえ、赤ちゃんのようにおっぱいを吸うなんて物心つけば恥ずかしいに決まっている。それも思春期真ただ中であればなおさらで、喜ぶのはごく一部の特殊性癖の持ち主くらい。だから当然男の子も細く小さな体をばたつかせているわけだが、小さくなって力も弱い体での抵抗など鬱陶しそうに眼を細められるのが関の山で、そのまま顔を おっぱいに押し付けられ強制的に授乳が始まった。

「はい次つかえてるんだから暴れないでさっさと飲んじゃってくださいねー。」

片手で頭を爆乳に押し付け、もう片手で爆乳を絞って。男の子が固く閉じようとした口は美人のお姉さんの乳首すら阻めず、口に捻じ込まれて母乳を注がれる。飲みたくなんてない。それでも溺れまいと反射的に喉をゴクゴク鳴らして飲まざるを得ない。思わず乳首を噛んで抵抗する。だがそれに対して健屋は「あっ・・・♡」と嬌声を漏らしてうっとりとした目で見下ろしてくるだけ。とても痛そうには見えない。所詮赤ちゃんサイズの抵抗なんてその程度でしかなかった。頑張ってる姿をお姉さんに楽しまれるだけの児戯。いっそよりおっぱいを求めるようにも見える姿に母性を刺激させるだけの可愛らしい醜態。

男の子が自分のおっぱいに負けている姿に母乳の出は良くなるばかり。男の子は目を白黒させながら抵抗が弱くなっていき、やがてだらんと腕を垂らしながら腹を膨らませていった。

「あぶな。破裂させちゃうとこだった〜」

啜えさせた時と同じように、無理矢理男の子の頭を引きはがす。ちゅぽんと解放された乳首からは母乳がつうと垂れ、張りのある爆乳にはまだまだ母乳が詰まっていそう。そうでなければ困る。担当した病室の全員に『朝食』を提供しなければならぬのだから。

白目を剥いて口から母乳を溢れさせてる赤ちゃん中学生を揺り籠に戻したら服を着直す事も無いままカーテンを開けて次の患者のベッドへ。そこも終わればまた次へ。最初の男の子以降は順調に『朝食』の時間が過ぎていく。最初の男の子の時点で、カーテンの向こうから聞こえてきていた健屋の嬌声、聞こえなくなっていた男の子の声。それらは抵抗は無意味である事を他の患者達

に知らしめた。彼らは断頭台に登るような面持ちでベッドの前に立つ爆乳看護師を見上げ、抱き上げられる。下手な抵抗をするよりさっさと終わらせた方がいい。そう思っただけ抱かれる彼らも毎朝起きる度に今日は今日こそはとプライドの為拒否してみせる、なんて決意していたのに、たった1回の授乳が1人の犠牲を出しながらそれをへし折った。

その上誰もが飲み切れず吐き出して、それを健屋はとびきりの笑顔で眺めていた。介抱するわけでもなく、ニコニコと、不気味な笑い声を漏らして。その嗜虐的な姿に、患者達は確信していた。患者達の心倍はあるこの医療従事者は、自分の性癖を満たす為にならざるを得ない母乳を矮小な体に注いできていると。これが、『縮小病』患者の世話を女性医療従事者が進んでする理由の一つだった。健康な男性や家族から隔離された小さくて惨めな男達を玩具にできる快感。あるいは嘔吐フェチの健屋のように、自分の癖をナマで満たせる玩具箱。犯そうと思えばいつでも抑えつけて犯して性欲を解放できる秘密の花園。朝露を受けた花のような美少年も、枯れて腐りゆく花のような不細工も。どの花も女性医療従事者達が手折る為にある。この小さな秘め事を、彼女達は誰に咎められることなく謳歌しているのだった。

■ □ ■

一通り『配膳』が済んだ健屋は服を着直し病室を後にした。向かう先は次の病室。ペたペたとまたサンダルの音を、鳴らしながら『ステージ2』と書かれたプレートの打ちつけられた部屋の前に辿り着き、引き戸をがらりと開ければそこには・・・先の病室と違って、個室の病室の真ん中に机がぼつんと置かれていた。構わず健屋は部屋に入り机の前へ。そして先程までと同じように、

エプロンとナース服を脱いで上半身だけ裸になってだぶつとおっぱいを曝け出すと、優しく声をかけた。

机の上の、集合住宅の模型群に。

「みなさーん、朝食の時間ですよー。出てきてくださーい」

その模型は、重篤な『縮小病』患者に与えられた特別な施設だった。精巧に作られた5階建て集合住宅の模型、その一部屋一部屋に、意思疎通すら出来ない程縮んでしまった患者達が何十人も住んでいる。1cmにも満たない極小の小人達。朝昼は蛍光灯の灯りを太陽とし、夜は月も星も無い真っ暗なだけの空を憂いて眠る、惨めな存在達。そんな彼らでも当然栄養は必要で、与えられるのは当然、母乳だった。その授乳方法もまた惨めなもので、集合住宅の前にある広場に患者が全員集まり、釣り鐘おっぱいから少しづつ垂らされる母乳を一舐めしては次の患者と交代するというもの。もちろん惨めというのとは小人にとつての話。与える側からすれば、おっぱいが天体のような化物に見えるであろうチビ達が雛鳥さながらに乳首に群がり、生を求めて必死になる様は実に愉快で、滑稽で。想像するだけで健屋はスカートの中の奥をしつとりと濡らす。皆まだかなーなんて呟きながら、嗜虐心を隠しながらあくまで医療従事者の顔をして小人達が出てくるのを待った。

しかし、小人達は1人として出てこなかった。手の平くらいある授乳広場にはいくら待っても人は集まらず、授乳の為に上を脱いだ健屋もだんだんと肌寒くなってくる。だがよくみれば集合住宅の屋上には何人かの埃と見紛う小人がいた。健屋は彼らに意思疎通の為の集音マイクとルーペを向け話を聞く。

彼らから出てくるのは、やれ食事が母乳は人権侵害だの、やれ家族にすら会えないのは監禁だの、そういった入院中の扱いへの

不平不満。それらが溜まりに溜まり、デモとして立てこもりをし
ているらしい。思わず、健屋は深く溜息をついた。

「あの、そういうのいいんで早くしてくれませんか？健屋もまだ仕
事残ってるんで。」

今この時間こそ（半ば欲を満たす為とはいえ）『縮小病』患者の
為に時間を割いている健屋だが、彼女が担当するのはここだけで
はない。医療従事者として、他の入院患者の元にも行かなければ
ならない。その仕事をこんな視認するのも一苦勞な程のゴミのよ
うな小人達のせいで遅れが出ているのは、非常にストレスだった。
だから苛立ちは隠すことなく声音にも表情にも出る。綺麗な顔立
ちも多少でも怒りを帯びれば恐ろしいものであり、それが150
0倍以上もの体格差がある相手ならなおさらで。授乳広場には行
かないという意志を示すためにわざわざ屋上に出た小人達は、無
機質な天井の空を隠す爆乳の向こうのしかめ面がぼんやり見えて、
少し腰が引けた。だが屈しまいとばかりにどかりとその場に座っ
てそっぽを向き、屁でも無いと言わんばかりの態度をルーペ越し
に健屋に向ける。

それが、彼らの運命を決定付けた。

「はあああああ？あのださあ、立場わかってんの？健屋がその気
になればこうできるんですけど？」

フツと空が暗くなる。最初は蛍光灯が切れたのか、あるいは消
されたのかと思った。それ以外に彼らの空が暗くなる理由なんて
ないのだから。結果としては後者の方が近いといべきなのだろ
う。振り返って見上げた空は空たる天井も太陽たる蛍光灯も、た

だ振り下ろされる爆乳メテオが遮っていたのだから。気付いた小
人達は反射的に立ち上がり、ろうとうとする。感情は何も追いついてき
やしない。ただ状況だけは直感的に理解して、逃げ出そうとした。

小さな小さな小人では、どれだけ急いでも間に合う訳がないのに。
瓦礫の音すら叩きつけられるおっぱいの音には勝てなかった。

「だぶうん！！と柔らかそうな音で叩きつけられたおっぱいは、そ
の実甚大な被害をもたらしている。爆乳メテオの真下にいた小人
達は集合住宅ごとおっぱいにめぐり取られていた。瓦礫・・・と
言っても健屋から見れば木屑程度でしかないが、彼らにとつては
5階建ての集合住宅の瓦礫の下に、何十人も仲間が埋まってい
る。助けに行きたかったができなかった。何せその瓦礫の山を、
集合住宅以上の高さがある、瑞々しく巨大な乳首が押し潰してい
るのだから。漏れ出る母乳は周囲に甘い香りを漂わせ、小人達は
頭は犯されていく。理性が残ってる者達は慌ててその場を離れた。
だが理性を破壊され、超巨大医療従事者のおっぱいに魅了された
者達は。仲間を何人も下敷きにした虐殺おっぱいに、瓦礫をよじ
登って群がりだした。仲間を助ける為、刺激してどかす為、なん
て、誰にもなく下手な言い訳を呟きながら。

一人では感じる事すら難しい小人も、何十人も集れば多少は存
在を感じられるよう。乳首に群がる小虫の群れに、健屋は「ん
っ・・・っあは・・・！」と嬌声を漏らしながら感じていた。髪
の毛一本でくすぐられていようなそばゆい感覚。その程度の
感覚とはいえ、それを感じる場所が場所となれば。ただでさえ大
きな乳首はむくむくと大きくなり、勃起乳首は集合住宅の残骸に
捻じ込まれて新たな犠牲者を増やす。そうして敏感になっていた
乳首にまた小さな刺激が折り重なって、ついに健屋の理性は弾け
た。脅してやろうとしただけの悪戯という名の見せしめは、もう
それでは済まなくなつた。

「・・・そういえば皆知ってる？『縮小病』の死亡率が100%
っていうの。あれ、実はちよっと違うんだよねー」

歪む口の端から涎を垂らし、頬を赤く染め、眼は見開いて。

「たしかに『縮小病』に罹ったら死ぬけど、『縮小病』自体は死に
至るような事はなくってさー」

ゆらり立ち上がって、胸先に小人の血を付けたまま胸を浮かせて。
て。

「『縮小病』でそこまで小さくなったら、おっきな女の子がみーん
な使っちゃうから死んじゃうんだよ？」

ゆさゆさ揺れる爆乳を集合住宅の真上に翳して、併設されてい
た小人用の散歩道やプールを潰しながら手について。

「それでは皆さん、お元気でー♪」

ぼたり。それが小人達の世界の終わりを告げる始めの音。肘を
降りドデカイ爆乳で一息に集合住宅を一棟壊した女の唾液の垂れ
た音。何もかも馬鹿げているとしか思えない。それでも、小人達
の終わりはそんな馬鹿げたもので、溢れ返りながら始まった。

くしゃくしゃとおっぱいの下に消えた集合住宅は全部屋満室だ
った。収容数はざっと50人程度。それが一瞬にしておっぱいに
どぶん！と潰されて、むにゅいゅいって広がるとみ乳に巻き込
まれてまた数十人がおっぱいの餌食に。そこでようやく、小人達

は気付いた。今から自分達の生きられる、最後の世界が壊される
ことに。いくつかある集合住宅から人々がようやく蜘蛛の子を散
らすように出てきた。あるいは恐怖のあまり部屋から出られず、
糸くずの布団に包まる者も。だがそんなものはおっぱい様には
関係無い。腕を伸ばして持ち上がった上半身から垂れさがるおっ
ぱい様は、どんな小人にも平等に接する。白衣の天使のように、
分け隔てることなく、どむん！！と赤いペンを書き損じた様な汚
れに変えてくれる。

「あー気持ちいいー！健屋のおっぱいだけで潰れてくの
たままないわあ！」

逃げる最中にふと顔を上げてしまった小人は、きつとこのまま
死んで、生まれ変わっても忘れる事ができそうにない光景を見る
事になる。白い手袋に包まれた手を思わず叩きつけてみたり、う
んと顔を近づけ逃げる小人の姿をしつかりと見収めてから体を押
し出しておっぱいドーザーで轢き潰したり。そんなケダモノが、
女神の様に美しい姿をして世界を蹂躪する様を。見えるのは上半
身だけ。あの獣には小人達の世界を壊すのにはそれで十分。何度
も落ちるドデカイ爆乳だけで世界のほとんどを圧縮し、誰もが屈
辱と恐怖と絶望のどん底に叩き落とされていく。その表情も既に
医療従事者を名乗るには程遠い。小人達の小さな世界を嬉々とし
て潰して周るその笑顔は、美しくも化物のそれ。その蹂躪を止め
られる者など、誰もいない。

「ほらほらあ、皆朝ご飯抜いたから逃げらんないんじゃないの
ー？えっへへへへえ、朝食の時間です、よっ・・・んっ・・・！」



集合住宅を破壊し尽くした健屋は一度体を起こした。小人達からしたら山をも潰せそうな爆乳にぼつぼつとついた極小の血痕。それらを意に介さず乳首を弄り、その手に収まらない爆乳を揉みしだく。すると噴き出てくる夥しい量の母乳。屈んで瓦礫の山に向けて放てば、世界はあつという間に大洪水に。生きてる小人も死んでる小人だったものも、全部が波に攫われていく。箱舟なんてある訳もない。そんなものを、虫の為に用意する理由が健屋には全くないのだから。

ちよつぴりとろみのある母乳洪水は留まる事を知らなかった。興奮し切った体は母乳を出しては作り出しては作り。小人達が苦しむ様を見たくてたまらないと体が底から疼くかのように。そんなただでさえ大洪水の量にとろみもあると、巻き込まれた小人は万が一にも浮き上がってこれない。底なし沼さながらに、濁流の底へと引きずり込んでいく。その上この洪水は自然のものではなく、人が悪意を持って作り出したもの。まだ無事な瓦礫の山の上に小人達が寄り添い避難しているのを健屋に見つかれば、いっと素敵な悪戯笑顔と共に矛先は向いて、悲鳴をあげた瞬間母乳に沈む。徐々に徐々に、『縮小病』ステージ2患者の居住区だった机の上は白く白く塗り潰されていき。ようやく、母乳がぶびゅつと満足げに一噴きして収まった時には、まるで机にペンキでもぶちまけたかのような有様だった。

「はー！問題のある患者さんが皆いなくなつてすつきり・・・はにゃ？」

美しさの割りに仕草は可愛らしく、小首を傾げる健屋。その視線の先は母乳の被害を免れた授乳広場。ひらけた広場に逃げればすぐ見つかると思えたのか、小人の誰もが逃げていかなかった場所。

だからこそ健屋の母乳洪水の目標にもされずに済んだ場所。だが一人だけ、逃げてきていた小人がいた。他の患者達に、自分達の待遇はおかしいと触れ回っていた、健康な時は大学生なりたてだった小人。いわばこの大虐殺引き金を引いた最初の人物。悪知恵が働くのか悪運が強いのか、彼だけはただ一人広場に逃げ、ゴミ以下の大きさのおかげで見つからずに難を逃れていた。だがついにその姿を健屋に見つかってしまった。小人達の世界を滅ぼした超巨大医療従事者お姉さんに。

必死に叫んだ。これからはちゃんと従うと。もう逆らったりしないと。食事を恵んでくれと。どうか許してほしいと。

そんな彼に向けてられるのは爆乳だけ。ルーペも集音マイクも必要ない。だって彼はもう『縮小病』の患者ではなく、健屋を気持ちよくするための道具でしかないのだから。意思の疎通なんでもはや不要。道具は道具らしく。

「よいしょー」

玩具にすらなれないゴミはゴミらしく、それでも慈悲をもって、乳首様に潰された。

しかしどうやらこの小人は、最期まで悪運が強かったらしい。

「・・・えっ、ちよ！？なんか入っ、てえ！？」

小人は潰されずに済んだ。小さい体は偶然にも、健屋の乳腺に入り込んだ。当然暴れる小人。おっぱいに潰されて死ぬのもおっぱいに溺れて死ぬのも、おっぱいに食われて死ぬのも、真つ平だった。だがその抵抗は健屋のおっぱい様を思いの外刺激してしまつたらしい。ぐんと引きずり込まれる体。蛇が獲物を丸呑みする

みたいな、そんな引き込み方。しまったと思った時には、そもそも唾えられた時点でもう遅い。ぐっ、ぐっと小人の体は乳腺の奥へ奥へと飲まれていく。その感触に、抵抗に、美爆乳の持ち主たる健屋が身悶えてるとは知らずに。

「オツ・・・これっ、いつい・・・！」

かくんとその場で床に膝を我が身を抱く健屋。小刻みに震え顔は耳まで真っ赤にして。股下に、下着をつけてるにも関わらず水たまりを作って。小さな人間が、自分の乳内を移動するのが伝わる。少しずつつ近づくかのように運ばれてくる。ゆっくりと、嚙下するよう。永遠のような後それがふっと消えた時、ぱたりと健屋は倒れた。視界はバチバチと、脳はくらくらと。肩で息をしながら余韻に浸る。おそらく乳管を通して小葉と呼ばれる、母乳を生産し溜める空間に放り込まれた小人。それがどうなったかはどうでもいい。ただ頭にあるのは、それを飲み込んだ時の感覚。ナカをずるりと通っていく感覚。感じた事のない感覚。その感覚を何度も何度も思い出し、嘔みしめながら。蛍光灯の灯りとカーテンの隙間から漏れ出る陽光の照らす部屋で、貪欲な淫獣は小さく鳴くのだった。

「やべー・・・最高じゃん・・・」

数日後、『縮小病』ステージ1の病室のベッドに空きができた。無論退院なんかではない。症状が悪化し、ステージ2と診断されたからだ。ステージ2は小さ過ぎるから、他の患者が誤って潰さないよう隔離される。

空の錠剤カプセルに入れられ移送される、この度ステージ2と

なった小人。入院前は高校生だった彼は、まるでキャリアバッグで運ばれる犬みたいだ、なんて思いながら、大人しく運ばれる。このままどんどん縮んでいつて死んでしまうのかと思うと怖かった。ステージ2になったら、あのおっぱいのデカイ綺麗なお姉さんに何をされるのかも考えるのが怖かった。ステージ1の病室の仲間達と離れるのが怖かった。でも、ステージ2の病室にも新しい仲間がいるはず。だからきつと大丈夫耐えられる。そんな事を考えながら、遠くから鳴り響くサンダルの音を聞きながら運ばれていった。

「はい、着きましたよ、出てくださーい」

カプセルに針で穴を開けられる。ここから出るという事なのだろう。ドキドキしながら、まだ見ぬ小さな新天地へ降り立つ。恐怖の中に希望を抱きながら、一步。

そこには何も無かった。何処までも無機質な地面。人っ子一人見当たらない鉄の砂漠。それが事務机の上だと気づくにはそうかからなかった。しばらく狼狽えながら辺りを見渡してから、振り返る。見上げる。言葉も失う。何度見てもドギマギしてしまう、綺麗なお姉さんのえっちな授乳姿。上に何も着ないでおっぱいがたゆんと揺れる。格好。目につくのはやっぱり、いつも配膳の時に口にしていた(正確にはさせられていた)、健屋の大きなおっぱい。それが今や大きいなんてものじゃない。小惑星すら挟んで潰せそうな程に巨大だった。そう感じる程に自分が縮んだ現実で引き戻され、また恐怖。口をパクパクさせながら後ずさり、足をもつれさせて尻もちをつく。その間におっぱいは小人目がけて降ってきた。表面にうつすら、母乳を滴らせながら。唾液を垂らす肉食獣のように。

「それじゃあステージ2の病室、ご案内します！」

あげた悲鳴は誰にも聞かれることはない。元より矮小な小人の悲鳴など誰にも届かない。それはこれからも、変わることはない。明日も明後日も、その先も。この病院に入院してくる『縮小病』患者は誰にもその声を聞かれないまま、健屋の性の慰みものとしておっぱいへと消えていく。抵抗も反抗も丸ごと全部。

そんな素晴らしい日々を馳せながら『病室移動』を終えた健屋はステージの病室で『順番待ち』になる少年達を、ドアの小窓からちらりと横目に見ながら通りすぎる。どのベッドもカーテンは閉じられ姿は見えない。けれどたしかにその向こうに、大事な玩具達がいる。よく見れば1つのカーテンの隙間から外を、病室の外の様子を伺うのが見えた。怯えた子犬のような不安げな視線。その視線に、優しい医療従事者の慈愛に満ちた優しい瞳を、貪り尽くす捕食者の歪み吊り上げられた唇を向けながら。

人知れずじわりと、胸先を濡らすのだった。

にじさんじ乳スタンプチャレンジ

作：D o l c h e

深夜。都内某所。

空洞になった店が立ち並ぶ通り。

そこを、一人の女が歩いている。

夜闇に映える長い金髪。交互にうねる腰。

沈黙した世界に規則正しく刻まれる足音。

女の他には誰も居らず。

目指す場所は一点のみ。

月下に映る女の影はただ直線的に伸びている。

青白い月光が街を照らしている。

月明かりは妙に綺麗だった。

空には凍り付いたように青い月と満点の星々。

都心の人々が久しく忘れていた原初の灯りが、女の豊かな曲線を縁取っている。

カッー、カッー、と靴音が響く。

他に音を立てるモノは無かった。

灯りの切れた街灯。

ヒビの入ったガラス窓。

塵の積もった店内。

無機物に還っている住宅。

何もかもが途絶えているような錯覚。
在るはずのものが無い違和感。

鏡写しの異界。

恐らくは——ピントが合ってしまったえば、二度と帰っては来られない、そんな風景。

だが、女がそれに目をやる事は無い。

幾度も繰り返した定型作業。

人とは慣れやすく、飽きやすい生き物だ。

終末の風景にも何の感慨も浮かびはしない。

女もまた、常識外の存在だったからだ。

住宅街を抜ける。

街のはずれに建っているオフィスビル。

五階建ての、明らかに古い時代の作り。

塗装の剥がれた壁。

掠れて読めないネームプレート。

滑らかにドアを開ける。

模造品と化した建物。

監視の目などとうに絶えている。

生命反応は二種類だけ。

訪問者の女と、運び込まれた小人のみ。

——靴音が響く。

その施設を知覚出来る者は企業でもごく少数に限られるが、女にとっては造作も無かった。

誰も居ない薄暗いフロアが続く建物内。

正面のエレベーターはダミーだ。真の通路はその横にある隠し扉の先。

地下へ続く階段を下ればそこに本命がある。唯一部屋に明かりが灯る「執行室」。

カチャリと鍵を回す。

オレンジのLEDライトが照らす室内。

配置された最新鋭の配信機材。

机に置かれたスタンプ用紙。

上等なメインディッシュがそこにある。

企画の準備は全て整えられている。

可愛らしいマスキングテープで隠された小人を見下ろして。

———魔女は、心底嬉しそうに胸元のファスナーを引き下ろした。

「ちゃんと撮れてるな、ヨシ。てかヤバいなこの小人。めっちゃ可愛いんだけど♡アイドルとかだったんじゃないかこれ……あーやっぱりそうじゃん。地下アイドルだったんだ。こんな所で夢が断たれるとか、私だったら絶対ヤだなあ」

ミッチリと詰まった胸が溢れる。

もう秋だというのに今年はずい。

ウォーキングウェアの下、蒸れた肌から立ち上る熱気。

暴力的な光景に胸の下から悲鳴が上がる。

他に反応は無い。今回は限定配信だ。

リスナーはただ一人。今も本社で配信の様子をチェックしている、この企画を持ちかけた女性マネージャーだけ。

「可愛いし、本当は持って帰りたいくらいなんだけどなあ……まあでも小人に「されちゃってる」んだからしやあないか。はい、それじゃにじさんじ乳スタンプチャレンジの方を始めていこうかなと思いまーす。リレーチャレンジのトップバッターということですね、まずはスタンプを選んでいくわけなんです……」

配信はオーダー通りに行われる。

コメントが無くとも話題には困らない。

用意されたスタンプは四種類。

ハート、スター、キスマーク、そして淫紋。

どう見てもアングラな流行であろうそのラインナップも、彼女にとってはちよつとしたネタとして都合が良い。

「イロモノっぽいのも混ぜてますが……まあ無難にハート型かなあ。どうか……みんなどういうの押すんだろ？ 何か、SNSでこっそり流行ってるらしいんだけど……あー、やっぱりハートくさいな……うん。じゃハートでいきまーす」

処刑道具スタンプは至って気楽なトーンで選ばれる。よいしょ、とごく無造作にブラから放り出される爆乳。

ドツプルルウンツ……！！

音を立てて揺れる超重量の山。



「んっ……あ、これクセになりそう♡」

更に強く押し付けられる。

快感に喜ぶ乳首が獲物に限界までめり込む。

強化魔術を掛けられた身体はそれでも崩れず。

ただ、中身だけが壊されていく。

圧倒的な乳圧を前に、為す術も無く殺される。

「ん——もう終わっちゃったか……早いなあ」

パチュン、と用紙から乳が離れていく。

たった数秒で物言わぬ乳拓に成り果てた小人。

見るも無残に塗り潰されたハート型を、魔女は上気した顔で見せつけた。

「これヤツバいな……エツロ……はい。まあ当たり前なんだけどバクニユイの勝利です。乳スタンプチャレンジ、余裕の成功です」

何かの記念品のように飾られた小人を残して。

最初の配信はそこで途切れた。

年齢、性別、職業を問わず誰であろうとインターネットが身近になった現代。娯楽、情報発信の象徴としてのテレビはその役目を終え、今やそれら全てがスマホ一つで完結する社会となった。

一方的な情報の送信にもはや価値など無い。

僅か十年にも満たぬ間の急速な技術革新。

リアルタイムの情報……感情のやり取りそのものが娯楽と化した社会。

あらゆる情報を容易に受信、発信できるシステムは様々なコンテンツを急成長させた一方で、悪性情報の伝播という深刻な問題を引き起こしている。

嫉妬、羨望、その他様々な理由による悪意の流出。鬱屈とした階層社会の弊害。行き場を失ったストレスの捌け口。動画配信を生業とするライバーにおいてもそれは例外ではない。

摩耗していく個人と改善が見られない状況。

そんな被害の拡大に対抗するべく開発されたのが、AIによる人々の自動選別技術である。

インターネット上に発信された情報を元にAIが人々を選別、法の下に確保、縮小処理の後に処罰するという一連のフロー。

「対象の社会的立場に配慮し、処罰はあくまで秘密裏に行うものとする」という建前から世間に公表されないまま稼働を始め、稼働開始から三ヶ月になる本日、AIによって問題があると判断された人間は実に百人を超える。

上々の結果に各企業は喝采を送り、システムの拡大を目指す方針を打ち出した。

「——と、なれば。」

縮小人間の処罰の為に、このような企画が催されるのはごく自然な流れであった。

「——しよつと。相変わらずここってちよつと狭いよなあ。機材置いたら特にそう感じるわ」

次に現れたのは、軍服姿の女だった。

白と水色と黒を基調とした立ち姿。

アメジストの瞳が目を引く女。

先の魔女と入れ替わるように現れた女は、手慣れた様子でモニターを確認する。

「ちゃんとマネージャーさんに配信されてるね。えーそれじゃあスタンプの方を……していいのかなと思うんですが。でもやる前にちよつと言わせて欲しい。私こっちの方で売る気は無かったんですが？ 呼ばれちゃったってことは……バレちゃったのかなあ。どうですかマネージャーさん？」

軽快なトークを繰り返しながら、女の指は軍服のボタンを外していく。

何の躊躇も無いその動作。

台詞とは裏腹の積極性。

「——それを、新たにスタンプ用紙へとセットされた小人が見上げている。」

「えーやつぱはバレちゃってるんだ……そうかあ……いや、でも私

これでも清楚枠なので。はい。そこはしっかりお願いしますよ。今回はちゃんとニーズにお応えしますけど、皇女なんでね？」

清楚、というのとはあながち嘘ではない。

紛れもない王族である彼女は、身に付けている物も、その所作も一級品だった。

公務の為の軍服を羽織っていても、そこには確かな気品が備わっている。

「——可憐な容姿と気品を備えた女性。」

秘匿されしヘルエスタ。その頂点たる第二皇女が彼女なのだと言われれば、何も知らない人間ならそう思う事だろう。

だが——それはあくまで人間の場合の話。

「目の前の女が誰なのかすら知らない」小人にはしかし、その本性だけは明確に理解出来た。

「まあスタンプはこれだよ。スター。他のはあんまり趣味じゃないし。今回は皆さんのご期待に応えるということで、こいつで今からこの小人をお星さまに変えようと思います」

子供のように笑う姿に戦慄する。

声が出ない。過度の恐怖で喉が潰れている。

ゴミでも見るかのようなその視線。

明らかかな侮蔑と興奮を含んだ笑み。

目の前の巨大な女は、処刑に対してあまりにも場馴れし過ぎていた。

凍て付いた思考の中で、惨たらしく押し潰された誰かの姿が繰り返されている。

それは、

もう、どうしようもなく、

数分後に待ち受ける、未来の自分の姿だった。

「—————」

祈るように力を込めても、テープで留められた手足は動かない。ふるふると涙を流して震える小人。

その姿を満足そうに見下ろして。

皇女はゆつくりと、薄い唇を近付けた。

「ねえ助けて欲しい……？ 助けて欲しいよなあ？ 今年から女子高に通い始めたばかりなんだっけ。しかもクラスの人気者だっでね。学校生活はさぞ楽しかったんだろうなあ……でも、残念でしたあ。お前の学生生活は今からスタンプされて終わるんだよ。どうせ一瞬だろうけど、精々私を楽しませろよ？」

愉しんで殺す、とその唇が告げている。

吐息すら殺意が滲んでいる。

嘲笑うようにブラが脱ぎ捨てられる。

スタンプがねつとりと貼り付けられる。

音だけでも絶望するには充分だった。

目を反らし、顔を背けても小人の震えは止まらない。

「酷いなあ、最期なんだからちゃんと可愛い顔を見せろー？」

「—————っ！！」

髪の毛を掴まれ、強引に向け直される。

幸いな事に、視界にはもう、あの恐ろしい皇女の姿は無かった。

……ただ、その代わりに。

ほんの目の前、吐息すら掛かる程すぐそこに。

ムクムクと起き上がる、巨大な——

「じゃあ死刑執行です、バイバイ」

————ドチュ！！

惨劇は、一瞬で終わった。

「——あーあ、やっぱり秒で終わったじゃん。圧死系ってこれだから不満なんだよなあ……」

スタンプを押してから数分後。

もう完全に動かなくなったソレから乳を離れた皇女は、心底つまらなさそうに立ち上がった。

余韻を味わい尽くしたワイン。

空になった残骸に彼女の興味は引かれない。

「あ。マネージャーさん、さっき言っていた印象操作のヤツお願いしましたよ。私、これからスラム街の処刑作業に戻るんで」

扉が閉まり、配信はそこで止まった。

再び無音の空間に還った執行室。

残された水色のスター。

強ばったまま潰された手指。

まだ女子高生だったソレの顔には涙すら無く。

皇女の乳に喰らい付かれ、押し潰されたその顔は、もうどんな表情をしていたのかも分からない程に塗り潰されていた。

皇女が部屋を去ってからしばらく経った。

飾られた記念品達が灯りを受け、テラテラと輝いている。

秒針の音だけが響く処刑の間。

時刻は午前〇時を指している。

配信は、その大部分が終了した。

リレーチャレンジもいよいよ次で終幕となる。

——で、あれば。

最後にはやはり、特上の贅が必要だろう。

「まあまあ……こんなに小さい子まで処罰されるなんて世も末と
言うか、何かの間違いとかでは？」

再びスタンプ用紙が置かれた机の上。

もう幾人もの小人が押し潰された処刑場に、誰よりも小さな罪人が用意されている。

それを見つけて、最後の来訪者は驚いたように声を上げた。

「うーん……でも、しょうがないのかなあ。これも規則だからね。
小人さん、だもんね？」

おっとりとした、天気でも話すような声色。

コツ、コツ、とゆっくりと歩み寄る。

口にまでテープを貼られ、慈悲を請うように震える子供。

まだ■■■■■を背負っていた、ほんの■■■■■の華奢な身体。
死の恐怖に打ちのめされた意識。

それを、慰めるように。

誰よりも穏やかな眼差しを持つ来訪者は、柔らかな笑みを浮かべながら、主の愛を語り掛けた。

「こんなに震えて……うん、もう大丈夫ですよ。きっと、無実なんですよね？ それなら大丈夫。神様がちゃんと見てくれますからね」

幻惑性の声が理性を揺らす。

細く白い指が怯える小人を優しく撫でる。

凍て付いていた心臓に血が通い始める。

およそ2日ぶりに感じる肌の温もりが、小人の警戒心を、正気を融かしていく。

「怖かったですでしょう？ でも安心してください。きっと、すぐに終わりますからね……」

何の根拠も無い気休めの言葉。

しかし嘘一つ無いその言葉が、小人を絶望から救い上げる。

どこか遠くを見るような彼女の眼差しに、決してテープを解いてくれない不可思議に、感じていたはずの違和感すら忘れさせる。

救世主か。

或いは聖女か。

——もしかするとこの人は、自分を助けてくれるのではないか。

目の前に佇むシスターが執行者である可能性すら忘れ、溺れるように夢を見る。

手放してはならないはずの猜疑心が、ぼろぼろと崩れ落ちていく。

「ここから、ちゃんと出してあげます……」

例えそれが、自分を破滅させる為の罠なのだとは本能的に理解していたとしても。

——まだ幼い心は、降って湧いた希望に縋り付く事しか出来なかった。

「……………！！……………！！」

「うんうん、少し待っててね」

シスターが離れていく。

小人の震えはいつしか止まっていた。

今まで晒されていた恐怖を拭い捨てるように、ただ一心にシスターの背中を見つめている。

引きつっていた顔が、喜びの涙で溢れる。

事実、幼い小人は無実だった。

だからこそその期待があった。

誰かに守られる事が当たり前の存在であった事が、きっと誰かが助けてくれるに違いないという思い込みを助長させた。

無理も無いだろう。まだスマホもパソコンも親から与えられていなかった彼は、ネットに書き込むどころか、そもそもライバーの存在すら臆気にしか知らなかったのだから。

——しかし。

修道服とは——ああも無造作に脱ぎ捨てられるようなモノだったか。

シスターが振り返る。

「……………!!? ………………!!!!」

テープで塞がれているはずの小人の困惑が、マイクにもはつきりと拾われていた。

コツ、コツ、とゆっくりと近付いてくる足音。

「大丈夫。大丈夫ですよ……」

小人の涙は止まっていた。

安心したからでは、無い。

オレンジ灯のライトを背に、マシユマロのような美乳を露にした女が立っている。

初めて目にする若い女の胸は、きつと命を奪う形をしていた。手にしているのは、淫紋のスタンプ。

天使のような微笑を浮かべたシスターの姿が、そこにはあった。

「あなたが本当に無実だと言うのなら……きつと大丈夫な筈ですからね」

恐怖には鮮度というものがある。

小人を最上級の贄とする為に、その希望を煽るよう注文されたシスターは考え、彼女なりの慈悲を示してやることにした。

反転したアイアンメイデン。

「この小人が本当に罪無き者であるのなら、小人にされたという罪を裁かれたとしても……そう、例え死ぬような目に遭ったとしても、主の奇跡が小人を救うだろう」という神の秤。

心優しいシスターは小人の幼さを憂い、人ではない小人にまでその慈悲を示し、生還の機会を与えたのだ。

——問題は。

その機会が、物理的に喪われていた事である。

愚かな小人に影が落ちる。

いつの世も、身勝手な勘違いをした者に与えられるのは重い罰である。

「……………」

シスターの表情は変わっていない。

そこにあるのは柔らかな笑みと慈愛だけだ。

マネージャーに一切話し掛けず、配信を気取られぬよう徹した

のは、他でもない彼女の優しさである。
本心から小人の事を案じている彼女に、一切の矛盾は無い。

目の前でスタンプが押される。
柔らかな胸に淫紋を浮かび上がらせたシスターは、小悪魔のよ
うに微笑んでみせた。

「このスタンプは線が細いから、ゆっくり押すからね？ 怖くても動いちやダメだよ？」

その一言だけは余計だったかもしれない。

——何故なら。

小人はもう、動く事は出来なかったのだから。

僅かな希望すら地獄に墮とす、真っ白な乳。
恐怖の処刑台。

既に、目を背ける機会すら失っていた。

柔らかな凶器が小人に迫る。

「あつ……ん、んん………」

ゆっくりと吸い付くように押し付けられる。

身を裂くような悲鳴が上がる。

ドグマに昂った乳首がそれを呑み込む。

マシユマロのように柔らかな乳が小人の呼吸を奪い、ゆっくりと壊していく。

酸素を奪われた心臓が暴れ、空気を取り込もうと膨らんだ肺が
じわじわと押し潰されていく。

悶えるような苦しみが、小人の希望を犯す。

「あ……ん、まだ……まだダメ……ダメだよ」

美しい神の秤。

何度も何度も乳圧を調整しながら潰す。

小人の罪は重く。

救済執行は、簡単には終わらない。

少しずつ。

少しずつ。

ゆっくりと。

………ゆっくりと。

「だってまだ……満足出来ないから、ね……？」

………。

………。

………。

罪を示す烙印が、幼い身体に刻まれた。

小人の絶望で濡れた乳輪。
乳白色の走馬灯。

確か、女の人に道を訪ねられた。

知らない人に話し掛けてはいけない、という言いつけは、困っている人は助けてあげなさい、という学校の教えに上書きされた。家で待ってくれていたはずの誰かの顔は、女の悩ましげな吐息に掻き消された。

主の愛は平等に注がれ、地上はその愛に満たされようとも、ここに神は不在ず。

主の愛は——人間にのみ注がれる。

「……………ふう」

20分にも及ぶ救済の果て。

ゆっくと立ち上がったシスターは、出来上がったスタンプを笑顔で壁に飾った。

「これでスタンプチャレンジはコンプリート、ですね？ うんうん。よし。ちゃんと模様が綺麗に押せて、その…：…ニーズにね、応えられて良かったです。マネージャーさんもお疲れ様でした」

扉が閉まる。配信が終わる。

その結果を以て、遂に審判は下った。
小人は敬虔なシスターによって裁かれ。

迫り来る、乳。

「助けて……………誰か助けて、たすけて……………!!」

——乳。

「い、やだ、やめて、やめてやめてやめて」

——乳。

「んっぐ、んっぐ、んぐうんうううう……………」

人々を押し潰す、ミルクタンクの如き乳。

地上波デビューを夢見ていたアイドルも、

友達と一緒に青春を過ごしていた学生も、
まだ何も知らない子供であろうと関係無く。

スタンプ用紙に囚われた者達は、その尊厳すら潰されて殺され
た。

一方的な処刑配信。

娯楽品と化した人間。

磔にされた記念品。

下品なインクに彩られ、罪人は死後も晒し者にされ続ける。

——そんな、悪夢のような牢獄から、彼女は奇跡的な生還を
果たした。

「居ない……誰にも見つかってない……？」

監視カメラの類は無かった。

隠れていた小箱から出る。

目も眩むような高さの崖を、何でもないはずの高さの机を、放
置された小道具の足場を使って降りる。

命懸けのアスレチック。

虫のような惨めさを堪えて、ドアの隙間を潜り抜ける。

さっき部屋を出ていったマネージャーは、配信は終了したと誰
かに電話していた。

「行方不明者が発生しているらしいが、特に問題は無いので無
視する」とも。

事実、配信機材の電源は落ちている。

小人の事など用件が済めばどうでもいいのか。

或いは脱走なんて考えた事も無いのか。

いずれにしろ、彼女を見ている者は誰も居ないようだった。

「やった……本当に誰も居ない」

廊下へ出る。

見渡せる限り、人の気配が無い事を確かめて走り出す。

元に戻る保証は無い。

この先どうなるかなんて分からない。

——それでも。

今はともかく、ここから出る事しか考えられなかった。

「はっ、はっ、はあ、はあっ」

気が遠くなるような長さの廊下を走る。

直線道路を延々走らされている気分だった。

でも休むつもりにはなれなかった。

助かるはずだ。

きつと何とかなるはずだ。

外へ出れば。誰でも良い、何でも良いから、知っている人のと
ころに辿り着ければ生き延びられるはずだ。手段なんて後で考え
れば良い。結婚を約束した彼氏だって居るし、今ごろはきつと自

分の事を探してくれているに違いない。

「はあっ、はあっ、はあっ………」

絶対逃げ切れるはずだ。

だって、私にはこんな目に遭う理由が無い。

あのマネージャーは言っていた。「ライバーのアンチコメを書き込んだ者達の処分企画が完了した」と。ゴミみたいな奴ら。そんな奴らが居るから私がこんな目に遭わされたんだ。死ねばいい。死ねばいい。バカみたいに大っきなおっぱいに潰されて死ねばいい。悪事を働いたのだから死んで当然だ。でも私は違う。今までずっと優等生で生きてきた。もちろん冤罪だ。書き込みなんてした事が無いし、そもそも興味だって無い。縮められたのだからきつと何かの間違いだ。それでこんなにあっさり見逃して貰えたんだ。日頃の行いの違いなんだ。だから他の奴らはみんな殺されても、私だけは助かるはずなんだ——

無我夢中で走り続ける。

パンプスが痛んでも構わず走り続ける。

600メートルくらい先。

ポツンとある誘導灯が、真っ暗な廊下の終わりを告げている。

朧気に見える輪郭。

扉は無く、出口の先には緩やかなスロープが続いている。

「やった、あれなら逃げられる……！」

脱出の成功を確信する。

疲れていた両脚に力が戻ってくる。

あと数分。ほんの数分でここから出られる。

「助かった……私、助かったんだ……！」

歓喜の声上がる。

彼女は落ちていた速度を再び上げようとして、

「……え？」

そのまま、つんのめるように浮かび上がった。

「うそ………きゃあああああ！！」

首を動かして振り返る。

みっちり張ったウォーキングウェア。

小馬鹿にするように笑う金色の瞳。

その姿は知っていた。

網膜に恐怖として刻み込まれた女だった。

あの恐ろしい爆乳の執行者が、彼女をあっさりと掴まみ上げていた。

「はい残念でした。脱走者は捕まえたぞつと。ここまで逃げたのは褒めてあげるけど、そんな簡単に小人を逃すほど魔女は甘くないんだよなあ」

「あ……やだ、はなし………きゃあああっ！」

女が立ち上がる。

遠ざかっていく地面。

廊下に浮かび上がった魔法陣。

あちこちに張り巡らされた感知網に、始めから逃げ場など無かった事を思い知らされる。

「あ………ああ、あ——」

足下を見れば、地上は既に高層ビルから見下ろした景色と化している。

抵抗は墜落死に直結する。だから身動きは許されなかった。

相手は理外の存在だった。

常識は捨てなければならなかった。

後悔は、本当に先に立たなかった。

踵を返して女が歩き出す。

あれだけ頑張って走った距離が、やっと見えたはずの希望が、ものの10秒足らずで無に帰していく。

「じゃあ帰ろっか。お姉さんが本来居るべき場所にさ」

「やだ……やめて……そこだけは……そこに連れ戻されるのだけはイヤアアアアア！」

悲鳴は届かない。

牢獄に還される。

魔女の家に連れ去られた人間がどうなるかなど言うまでもない。机の上に残された最後のスタンプ用紙。

標本のように押さえつけられ、何も出来ないまま処刑台に掛けられる。

「いや、マジでちゃんと転送陣張つといて良かったわ。こんな可愛い子をほったらかすとかありえんやろ。ね、お姉さんだってそう思うでしょ？」

「待って……違うの、お願い放して、お願い……！」

「ん……？ いや放すわけないじゃん。小人さんが何言ってるのかなあ？」

「違う、違う！ 違うんです！ 私書き込みなんかしてな——ヒイツ」

ズン、と両手を突いて女が身を乗り出す。

巨大な乳を目の前に振りかざされる。

上ずって間の抜けた抗議は、ただそれだけの動作で阻止された。女はあーあれね、とカラカラと笑いながら、

「いや、違わないから。ってか全然関係無いからそんなの」

そう、あつけらかんと口にした。

「え………え？」

「いやだつてさ、書き込みしたヤツの特定とか、やっぱコスト掛かっちゃうじゃん？ 私はシステムに関わったから知ってるんだけど、本当は可愛い子をSSでテキストにサーチして、ライバーのファンかどうかを確認してから縮めてるだけなんだよ。皆の捌け口としてさ」

「——え、うそ……待って……え？」

「嘘じゃない嘘じゃない。お姉さんは小人にされたんだから、もう私に使われるだけなんだよ」

目の前で脱ぎ捨てられるブラ。

音を立てて熱風が落ちてくる。

左手にはキスマークのスタンプ。

爆乳から滴る汗が頬を濡らしていく。

——分からない。

どうしてこんな事になったのか、分からない。

あのアイドルだけでは物足りなかったのか。

目の前に晒け出されたソレは、明らかに小人を潰したがっていた。

「……………あ、ああ、待って……………お願い、待って……………」

「他のスタンプがめっちゃ良かったから試したかったんよなあ、キスマーク。前のアイドルの子の時もすごいエッチに仕上がったし、配信はもう終わっちゃったけど番外編ってことでさ、これ今からお姉さんに押しちゃおうかな」

「やだ……………イヤだ……………やめて、おねが」

「ダメでーすもう我慢出来ないし絶対押しまーすバクニユイキツスしちゃいまーす……………ねえ、やっぱ何か勘違いしてない？ あのまま、そもそも小人に拒否権なんて無いから」

嘲笑うようにそう告げられる。

べつとりとスタンプが乳に貼り付く。

大きな乳輪に貼り付いた真っ赤なキスマーク。

これから自分に押し付けられる、キスマーク。その光景を、ただ茫然と見ているしかない。

——違う。

違う。違う。違う。こんなのは違う。

だって私は何もしてない。

こんな目に遭うような悪い事はしてない。

ずっと良い子で過ごしてきた。

周りはいつだって自分を褒めてくれた。

周りはいつだって自分の味方だった。

恋人だって何だって困った事は無かった。

助かるはずなのに。

助けられなきゃいけないはずなのに。

……………なのに、まるで言葉が出てこない。

身体の中にあるのは噎せるような谷間の空気とこれから起こる事への恐怖だけだった。

「やっぱ可愛い子って泣いても可愛いよなあ……………ちよつとズルくな〜い？ 小人じゃなかったら嫉妬しちゃったかも。けどさ〜何も言わなくてええんか？ ほらほら、もうすぐおっぱいに潰されちゃうのに本当に喋らなくてええんか？」

小馬鹿にするように煽られる。

さっきからずっといたぶられている。

どうすれば良いのか分からない。

——分からない。

こういう時、何て言えば助けて貰えるのか分からない。

「死にたくない……死にたくない……やめて……死んじゃうから、そんなの乗せられたら、本当に、本当に死んじゃうから……ねえ、お願い……」

女は憐れむような、蔑むような、嘲笑うような表情で見下ろしている。

昂った息遣いが聞こえる。

ハア、ハア、と何かを抑えつけているような、もうすぐ溢れてしまいそうな吐息。

分かるのは、それが、もうどうしようもないくらい自分に向けられている事だけだった。

「ふーん……結構そそる事言ってくれるじゃん」

「……え？」

——命乞いには意味が無い。

取引にしろ懇願にしろ、対等以上の関係性でなければ成り立たない。

相手が人間で、自分が小人である以上、そこにある強弱の関係は絶対である。

そんな生き物として当たり前の事実には、どこまでも「良い子」でしか無かった彼女は、最期まで気付けなかった。

「うん。やっぱお前思いつきりおっぱいで犯して壊すって決めたわ。はい、んちゆううっ」

「いやっ……こないで、イヤアアアアアア！」

結果として、このように。

彼女は、何の手加減も無しに押し潰された。

「んぶっ、んん、んんんんんん！！！」

犯される。

何の躊躇も無く壊される。

口の中に入ってきた空気。

汗と乳と女の匂いが混じったソレに噎せ反る。

そんな空気でしか呼吸出来ない事に絶望する。

漏れ出た絶叫が、どんどん圧力を耐え難いものにしていく。

「んんっ……いい……やっぱこれめっちゃいい！ ほらもつと抵抗して、もつと叫んで、もつと声出せるだろほら！！！」

痛い。痛い。イタイ。

重い。重い。オモイ。

クルシイ。クルシイ。クルシイ。

全然気持ち良くなんてない。こんなに痛いのは知らない。こんなに苦しいのなんて、知らない。

途方も無いモノに押し潰されている。

骨が砕ける音がする。
肺が潰れる音がする。

ハア、ハア、ハア、ハア……！！
耳障りな、昂った女の音がする。

ミチミチと固くなった乳首に胸を潰されて、遂に心臓すら押し潰されて。

完全に動かなくなっても尚、その身体は潰され続けた。

「……………ハア、ハア、ハア……ああ、久々におっぱいでイっちゃったわ。このスタンプ買おう。めっちゃ使えるじゃんこれ」

舌なめずりをする魔女の声。

最後の罪人は、圧倒的な質量の下に処刑された。

私を見たとき
どこに目が行ったかな？

それが君のフェチだ
挟んであげよう

おわ、

440

おちい

* 配信内の
セリフ



フリンちゃんのおっぱいで
〇〇くん溺れちゃってる

女の子のおっぱいで
溺れるなんて幸せじゃん







口木子ハ
描きたかた
カ







カキカッア...

あとがき

コミケではC93以来お久しぶりになります。

今ではすっかりVtuber沼に浸かってしまい、グレーゾーンを走り回りお絵描きを続けています。

基本的にはじさんじ推しで、この本も案の定リゼでゴリ推す形になってしまいました。

たぶん次回参加もリゼになる可能性が高いですね残念ながら。

ホロライブや個人ももっと描きたかったのですが見通しが甘く断念。

次回は必ず。

ゲストの方にもVtuberのサイズシチュとかいうグレーに付き合っていていただき大変感謝の極みです。素晴らしい作品を複数いただけてとてもありがたい。

アニメキャラや漫画キャラにない生々しさといいますか、そのあたりにしか性的アレが感じなくなってしまうと…このどうしようもない部分が落ち着くまでもうしばらく描いてると思います…。

Twitter(X)、凍っちゃったのでVを取り扱う部分もあり再作成もやめようかと思っていたのですが、やっぱり好きなものを広めるにはこうした危険を犯した方が楽しいし効果的だなあと感じていつものぎりぎり原稿を実行しました。新しいXアカウントをよろしく願いいたします。

Vきつい人は今のうちにさけておいてくださいね。

次もコミケ出るとしたらまた冬コミがいいですね。それまでお元気で。

いばら一ど/@Exrumya_X

Guest



なつき/Illustration

猫又おかゆ(ホロライブ)
笹木咲・椎名唯華(にじさんじ)



まるしゃも/Comic

猫舐つな(個人勢)



コルヨノ/Short Story

健屋花那(にじさんじ)



DoLche/Short Story

ニューイ・ソシエール
リゼ・ヘルエスタ
シスタークレア(にじさんじ)

-奥付-

「Vがでかい本」

発行日：2023/12/31

サークル名：BigMeatBun

著者：いばら一ど

X(旧Twitter)：@Exrumya_X

印刷：株式会社サングループ 様

